

近畿・滋賀の民具

Mingu of Kinki District-Shiga

辻川智代









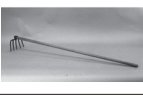














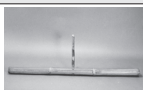


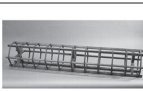

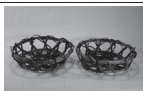








凡 例

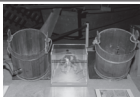
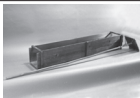













- 1) この表は滋賀県立琵琶湖博物館の所蔵資料をもとに作成した。特に出典を明記していない場合はその資料である。ただし、所蔵資料にないものの、重要と考えられる資料に関しては、既往の文献から引用し、出典を明示した。
- 2) 発音の長音化、促音化などの音便や表記のゆれ等は便宜上統一した（例フゴ・フゴウ、トオシ・トウシ、シャクリ・シャックリ）。ただし、双方の発音が重要と考えられているもの（例ワラジ・ワランジ、ゾウリ・ジョリ）については掲載した。
- 3) 滋賀県での地域名称については、比較的共通する名称もしくは上位の分類に属する名称を「滋賀県での名称」に、それ以外の名称を「材質」「用途」「形態」「その他」に分けて記載した。
- 4) 分類の並び順に関しては、『国際常民文化研究叢書 6 一民具の名称に関する基礎的研究—[民具名一覧編]』（神奈川大学 国際常民文化研究機構 2014）の一覧表に準拠した。ただし、下位の分類や一覧表にないものに関しては独自の基準で並べている。
- 5) 参考文献については、著者（略称）と刊行年で記した。ただし、滋賀県教育委員会編『滋賀県民俗地図—滋賀県緊急民俗文化財分布調査報告書—』のみ「民俗地図」と表記した。
- 6) この民具一覧の作製と、「説明欄」の文章は、辻川智代が担当した。


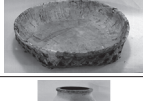

目 次

農耕用具 ……………p. 191	交易用具 ……………p. 209
畜産用具 ……………p. 194	衣 ……………p. 209
山樵用具 ……………p. 195	食 ……………p. 212
漁撈用具 ……………p. 197	住 ……………p. 216
狩猟用具 ……………p. 200	社会生活 ……………p. 218
養蚕用具 ……………p. 201	信仰 ……………p. 218
紡織用具 ……………p. 202	民俗知識 ……………p. 219
手工用具 ……………p. 203	人の一生 ……………p. 220
諸職 ……………p. 203	年中行事 ……………p. 221
運搬用具 ……………p. 207	

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
農耕用具							
耕起・代掻き							
鋤		スキ ホリ	カナズキ	アゼホリボリ タハネボリ ホリタスキ ハネタスキ	オオスキ チュウズキ コスギ サキヤリズキ シャミズキ テッポウズキ ヒラズキ	ミノズキ	水田の耕起や溝掘りなどに使用する。湖北の一部では「ホリ」と呼ぶ。鋤先を半月状に尖らせたものをサキヤリズキといい、湿田で鋤の刃先を左右に倒しながら鋤いた(長谷川2006)。
坂東鋤		バンドウズキ		レンゲズキ コナホリズキ ノイボリズキ		バンドウズキ	鋤先から柄までを鉄で一体に作る。握部のみ木製。愛荘町の坂東米次郎が大正時代に考案、大正8年に「坂東式大鋤」として実用新案を取得した(愛知川町2008)。
下駄鋤		ゲタスキ			ゲタスキ	カイリヨウボリ	深田の耕起に使用する。テコの原理でゲタを支点に掘り起こした。
鋤		クワ フログワ	キグワ	アゼヌリグワ カイコングワ スジキリグワ ハタケグワ	オオグワ チュウグワ コグワ ヒラグワ	ダンガ	風呂鋤。水田の耕作、畦塗り、畑の畝立て、土かけなどに使用した。開墾に使用する大型の鋤を「カイコングワ」という。
唐鋤		トグワ		ミノキリグワ	バチグワ サキボソクワ カモノハシ	トグワ トンガ	畑の畦、溝、穴掘りなどに使用する。また、木の根の多い所で根を刃先で切り取りながら掘りすすむ。ツルハシのようにも使用した。
三ツ鋤		ミツグワ ビッチュウグワ		アラタグワ クダキタグワ マヤダシグワ	ミツグワ イチョウグワ クマテグワ	ビッチュウグワ ビッチュウ	畑の固い土を耕作する。刃先が尖っているものと平たいものがあり、後者を「イチョウグワ」という。
二ツ鋤		フタツクワ		ウネウチグワ ダイウチグワ	フタツグワ		田の稲と稲の間や農作物の畝の間を打ち起こす。
四ツ鋤		ヨツグワ			ヨツグワ イチョウグワ ヨツクマデ		田畑の土起こし、土入れ、土砕きに使用する。
五ツ鋤		イツツグワ			イツツグワ		田や畑の土をならしたり、レンゲを鋤き込むのに使用する。
掘串		フグセ ツキボウ		キメツキ アナツキボウ ツキボウ クツツキボウ		フグセ	田の畦に豆を植える際に穴をあける道具。
塊割		クレワリ ドロカチ		クレワリ ドロカチ キサミ			田の耕起で掘り上げた土塊を乾かし、これで打ち砕いて細かくする。
犁		カラススキ		ヒトカラススキ ジンリキカラス スキ		カラススキ	牛に曳かせて田を起こす。人に曳かせるもの、二人で曳くものなどがあつた。
馬鋤		マグワ マンガ		アラマンガ ナラシマンガ	マグワ ハリマグワ	ハロ	牛に曳かせて犁で荒起しした土を細かく砕く。
		マグワ アサヒマグワ			マグワ	アサヒマグワ	「アサヒマグワ」は米原市朝日の坪井農具製作所が製作していたもの。
碎土器		サイドキ ツチキリキ		サイドキ ツチキリキ			牛に曳かせて田の土を細かく砕く。
カルチベーター		カルチベーター				カルチベーター	牛に曳かせて耕作したり、麦の播種に使用した。
谷揚機		タニアゲキ		タニアゲキ			牛に曳かせて畦の間の土を上のにせる。

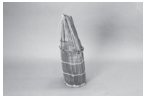



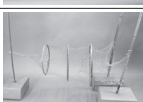


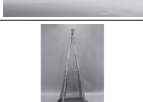

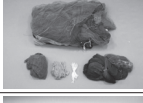






名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
柄振		エブリ マグワ		マンガカケ シルタマグワ	マグワ	エブリ	田植前に水田の土をならす。
大足		オオアシ ウワシ ナンバ		オオアシ	ナンバ		杉を梯子状に組み、その上に板をのせる。これを履いて田のすみずみまで歩き、堆肥などを埋め込み、同時に田面をならした。
畦叩		アゼタタキ		アゼタタキ ナカサシ ドヤシ ホヤタタキ	アゼツキアシガ タ		水田の水が漏れないように畦の土を打ち固める。
鋤簾		ジョレン ジョリン		ドロカキジョウ レン			溝の土をあげたり、田畑の土を寄せるのに使用する。
種蒔・田植							
柄振		セイチダケ	セイチダケ	ジナラシ シルツクリ シルフミイタ ナワシロナラシ	ゾンゾロボウ		苗代をつくる時に、まき床を水平にする。ゾンゾロボウはシロカキに使用する重い棒(県教委1966)。
糞押え		モミオサエロー ラー		モミオサエロー ラー モミオサエ モミローラー	モミオサエロー ラー モミローラー		苗代に糞種をまき、その上をこれで軽く押さえ、種を泥の中に入れる。
田植縄		タウエナワ タビキツナ	シュロナワ	タウエナワ タビキツナ ナワシロヒモ			田植の際に畦から畦に田植縄を張り、それを目安に苗を植える。
田植枠		タウエワク		タウエワク タウエグイ ケンザオ ケンジャク ジョウギ			田植の際に田植枠を田の表面に転がして跡をつけ、その跡に苗を植える。
		タウエワク		ナエガ	サンカクジョウ ギ アンドン		田植の際に苗を植える間隔をはかる。
苗籠		ナエカゴ	タケフゴ	ナエカゴ ナエイレカゴ ナエモチカゴ ナエモッコ ニナイカゴ	ジャカゴ		苗代の苗を入れ、水田まで運ぶ。苗は束にし、外側に根、内側に先を入れる。ナエをナヨという地域もある。
施肥・除草							
麦の土入		ムギノツチイレ キ		ムギノツチイレ キ ムギノツチイレ ツチクダキ ジョレン			麦の分根のため、芽の上に土を被せるのに使用した。
鉋		ニシンキリナタ		ニシンキリ ニシンキリナタ			肥料用の鯿を切断する鉋。
豆粕削機		マメカスケズリ キ		マメカスケズリ キ マメカスクダキ キ マメカスワリキ			厚さ10 cmくらいの円盤になっている肥料用の豆粕を削る。
肥桶		コエオケ		コエオケ タゴケ シモゴエオケ			下肥を入れて天秤棒で担い、田まで運ぶ。運ぶ時はマキワラと蓋で密閉した。
鎌		クサカリガマ		クサカリガマ クサムシリガマ ハダサガマ	ウスガマ チュウガマ アツガマ	セセリ	草刈用の鎌。用途によって厚みが異なり、ウスガマ、アツガマなどと呼ぶ。
		ナギガマ		ナギガマ	ナガエノカマ ナカテガマ	エチゼンガマ	細い刃で横になぎ倒すものと山の下草刈用とがある。長柄のものは土手などの草を立ったまま刈る。
除草機		メンパ タカキ		タカキ タウチグルマ ジョソウキ クサトリキ ナラシ	メンパ	ハッタンドリ	田植後、稲の株間を掻いて除草する。
		タカキグルマ タウチグルマ		タウチグルマ タカキグルマ クサトリグルマ	カメ	ハッタンドリ	回転式の除草機。



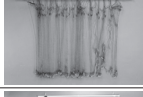




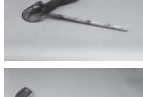
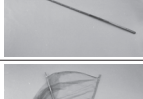


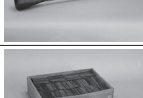

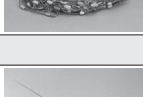



名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
灌漑							
桶		ミズモチシヨ ンボケ		ミズモチシヨ ンボケ	ミズモチシヨ ンボケ		桶を水に突っ込んで水をくみ、天秤棒で担いだ。中の棒をぬくと底から水が出る仕組み。彦根市から長浜市の湖岸地域で使われた(長谷川2006)。
ゴイ		ゴイ ジョウゴ			ジョウゴ	ゴイ	川や用水から水田に水を入れる。一方を水につけ、もう一方の端を田面へ向けて、水をかき上げ田へ入れる。
竜尾車		サザエガラ サザエ			サザエガラ サザエ タニシ		川や溜池から水田へ水を汲み上げる。杭を打ち、台にして斜めに置き、手でまわす。また、築を作る際に溜まった水をかき出すのに使用。
竜骨車		リュウコシ テングリ			リュウコシ テングリ		主に近江八幡市で製作され、湖南・湖東地域で使用された。高島市ではジュウゴシ(大塚1979)。
踏車		ミズグルマ ジャグルマ		ミズグルマ スイシャ	ミズグルマ ジャグルマ		川から水田に水を入れる。焼印より、大津市、近江八幡市、彦根市などで製作されたことがわかる。
害虫・害獣除け							
蚊火		カンコ					薬製。火をつけて煙をだし、農作業中の蚊よけとした(余呉町1991)。
土竜捕り		モグラトリ ムクラトリ		モグラトリ ムクラトリ			土竜の通った穴に仕掛けて、反対側から追い込み取る。
収穫・脱穀							
田下駄		タゲタ ナンバ		タゲタ タカリ	ナンバ		稲刈りの際、湿田で沈まないように履いた。
稲刈機		イネカリキ		イネカリキ カイリョウイネ カリキ		バインダー	稲の根元をはさみ、前へ押し出して刈取る。8株で1把となる。
千歯扱		イネコキ センバコキ	カナゴキ	イネコキ イネコキマグワ	イネコキマグワ マ加里センバ ツメ	センバコキ	刈り取った稲を一束ずつ歯の先端に添えて力強く手前に引く。尖った部分で穀がしごけて脱穀できる。
足踏 脱穀機		アシブミダッ コッキ		ダッコッキ イネコキカイ	アシブミダッ コッキ センバ	ガイコン	稲穂、大豆、小豆、胡麻、菜種等の脱穀に使用する。ガイコンの名前は動かすときの音から。
脱穀棒		ダッコクボウ ヤタカチボウ		ダッコクボウ ヤタカチボウ ヤタテボウ タタキボウ		バイガチ バイ	穀を叩いて不用物を取り除く。豆にも使用。
		ヤタカチボウ ヨコガチ		ヤタカチ ヤタウチ タタキボウ ヤタカチバイ ヤイタカチ	ヨコガチ ヨコザシ ナカザシ	バイ	穀、豆、麦、粟などを筵で天日乾燥し、これで叩いて落とす。
唐竿		カラサオ		マイサオ フリバエ フリウチバイ		カラサオ	豆類の脱穀用具。豆を筵の上に撒き、日光で乾かす。竿を上下に振ると先が円弧を描いて回り、豆に打ちつけて脱穀する。
扱箸		コキバシ		コキバシ マメコキ			大豆など豆類の脱穀用具。割った竹の間に枝つきの豆をはさみ、根元を手前に引くと豆と枝が分離する。
麦打台		ムギウチダイ		ムギウチダイ ムギウチシヨウ ギ			この台に叩きつけて麦の穂(主に大麦)をとる。
調整・選別							
唐箕		トウミ トウツワ				トウミ トウツワ トングリ	穀とゴミ、穀殻と玄米などを選別する。
		トウミ ヌカトウツワ		ヌカトウツワ		トウミ	カラウスで精米する際に穀と米を選別する。







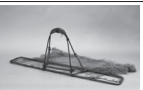











名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
万石通		カナドオシ マンゴクトオシ	カナドオシ			センゴクドオシ マンゴクトオシ	土臼で挽いた米と籾を撰別する。脚が可動式と固定式がある。高島市では近代に改良したものをマンゴクトオシという(白井1990)。
通し		トオシ		コメドオシ コゴメトオシ モミトリドオシ			籾と米や割れた米を選び分ける。他にもマメトオシ、ナタネトオシなど用途によってさまざまな呼称がある。
箕		ミ			オオミ ショウミ	ニシヤمامミ	籾や米を入れ、上下に手で振り不要物を分ける。他にも様々な選り分けに使われた。ニシヤمامミは長浜市木ノ本町西山で製作されたもの(山東町1988)。
籾さがし		モミサガシ		モミサガシ モミカキ モミマゼバイ			天日に干すため、筵に籾を広げる道具。
精米							
土臼		ドウス モミスリウス	ドウス ドロウス	モミスリウス センベウス			中に籾を入れ、上の部分を回転させ、籾殻を取る。
唐臼		カラウス		コメツキウス	ダイカラ ジカラウス	カラウス	米を精白する道具。移動式のをダイカラ、地面に石臼を埋めたものをジカラウスという(山東町1988)。
割鉢		キジバチ		モミスリバチ カラウスバチ		ゴシ	白で精米する際に米を白に入れるのに使用した。
製茶用具							
茶摘籠		チャツミカゴ		チャツミカゴ	オオカゴ		茶摘の際に生葉を運搬するのに使用。
焙炉		ホイロ ジョタン		ホイロ ロウバコ	ジョタン		製茶時に蒸した茶を乾燥する道具。木枠の中に炭火を入れて下から熱しながら、蒸し終わった茶葉を揉む。
製茶機		セイチャキ		セイチャキ			上の口から生の茶葉を入れ、下の口から蒸気を箱の中に送り、ハンドルを回転させると、揉まれた茶葉が箱の下の口から出る。
茶篩		チャトオシ		チャトオシ	チャトオシ		竹製。底は藤蓐。半製品の茶を少量ずつ入れてふるい、軸木や粉茶を選び分ける。
籠		シアガリカゴ サマシカゴ		チャトオシ シアガリカゴ サマシカゴ			竹を六ツ目に編む。製茶の仕上げに使用。「仕上げふるい」に用いるものと生葉のみをふるうものがある。幅50 cm以上のものは生葉用である。
		シアガリカゴ		シアガリカゴ	ハリコ		竹籠に和紙を張り、柿渋を塗ったもの。中に茶を入れて選別する。和紙を貼った籠を「ハリコ」「ハリボテカゴ」という。
茶壺		チャツボ		チャツボ			信楽焼。製茶した緑茶を入れて保存する。
茶櫃		チャビツ		チャビツ			木箱に反古紙を貼ったもの。収穫した茶を保存する。
その他の収穫・加工用具							
柿千切		カキチギリ バランサオ ハサミコ		カキチギリ	バランサオ ハサミコ		竹の先に切り込みを入れたもの。切り込みに枝を刺して回すと枝がちぎれて収穫できる。柿、栗等の収穫時に使用する。
畜産用具							
飼育用具							
鍋		トナベ		ウシノトナベ	トナベ		牛の飼料である藪や豆を煮る。トナベは一斗鍋の略称。




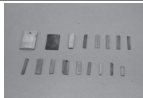









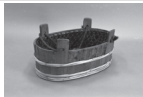


名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
押切		オシギリ		オシギリ カイバキリ			牛の飼料の稲藁を20 cmほどに切断する道具。
飼馬桶		カイバオケ		カイバオケ ウシノモンオケ	ツノオケ		牛に与える草を入れる。
ブラシ		ブラシ ハケ	カネブラシ	ウシノブラシ ウシバケ			牛の毛を洗う道具。
牛馬の装具							
鞍		ニグラ		ウシノクラ ウシノニグラ			牛に荷物を運ばせるときに使う鞍。牛の背に毛布や厚布を敷いて鞍を置き、腹帯を締めて固定し、荷物を乗せたり、吊り下げる。
		タグラ		ウシノクラ タグラ			水田耕作の際に牛に犁や馬鍬を曳かせるときに使う鞍。
首木		クビキ		クビキ ウシノクビキ			タグラと共に使用し、犁や馬鍬からかかる力を受ける。
尻木		シリギ カイボウ		シリギ シリボウ カイボウ	マルカセ		犁や馬鍬から紐を伸ばして、尻木に固定する。
腹帯		ハラオビ		ハラオビ			タグラを牛の背に固定させる帯。
口籠		クチカゴ クチフサギ		クチカゴ クツロゴ クチフサギ			耕作や移動時に牛が草を食べないように牛の口に取り付ける。成牛や仔牛の口の大きさに合わせて作る。竹製や藁製、金網製がある。
追網		オイヅナ		オイヅナ			牛に命令を伝える道具。牛のハナギにくくりつけ、後ろから胴に打つようにしながら「シイシイ」というと牛は進む。左後に引きながら「オーオー」というと牛は止まる(東近江市川合寺町)。
蓑		ウシノミノ		ウシノミノ ウシノアマミノ			雨の日に牛に着せる蓑。
沓		クツ ワラジ ゾウリ		ウシノクツ ウシノワラジ ウシノゾウリ			牛の足に履かせる。
鶏籠		トリカゴ		トリカゴ ヒヨコノカンゴ ヒヨコバコ			鶏を飼育する籠。
水差		ヒヨコノミズヤリ ダルマ		ヒヨコノミズヤリ	ダルマ		鶏用の水入れ。
山樵用具							
杣用具							
鉈		ナタ		ヤマガタナ		エチゼンナタ	山の木を伐ったり、薪を割る。木の根元を切る時に先が出ていたため、刃が直接石や岩に当たるを防ぐ。ヤマガタナは柄の短いナタで、山に行くときに鞘に入れて腰に差す(朽木村1974)。
籠		ナッタカゴ		ナッタカゴ			鉈を入れる鞘。木を薄く切り籠に編む。





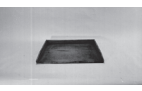


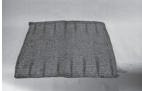
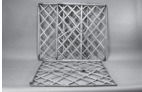
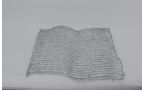

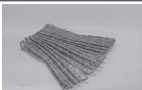


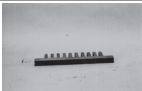


名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
鎌		シモカリガマ ヤマハライガマ		シモカリガマ ヤマハライガマ			山林の下刈りや荒地の手入れなどに使用する柄の長い鎌。
		キガマ		キガマ		ジャケガマ	山林の下刈りや荒地の手入れなどに使用。ウスガマより大きく厚い。枝打ち、業種刈に使用した(八日市市1986)。
鎌鉈		カマナタ			カマナタ		枝打ちや木を細かく裂くのに使用。
熊手		コマデ		コマザライ	コマデ ガニ		山林の落葉をかき集める。
萱選り		カヤスグリ		カヤスグリ			秋に萱を刈るときに使用。萱を束ね、根元の葉や雑草類を取り除く。
木挽用具							
斧		ヨキ					山の木を伐採する。
鋸		リョウビキ タテノコ		タテノコ	リョウビキ		横倒しの原木を輪切りにする道具。二人が対座し、押したり引いたり動作をくり返す。60~70cmの直径の原木を切るのに1時間程度かかったという。
		マエビキ オガ		マエビキ コビキノコ	オガ オオビキカンド		大木から板を切り出す時に使う。一人挽用。
		オオノコ ガンド		コシノコ	オオビキカンド		原木の枝切りや梢の細い部分を輪切りにする時に使用する。頭の形が鱗に似ているため、「サバ」ともいう。
皮剥		カワハギ		カワハギ			伐採した杉や檜の表皮を削るのに使用する。剥いた皮は瓦屋根の下地として販売したり、萱葺屋根の棟や庇用に使用した。
搬出用具							
鷹口		ツルトビ			ツルトビ トビクチ		原木等の切り出しの際にひっかけてひきずり降ろす。
木馬		キンマ ソリ	キンマ		キンマ ユキゾリ	シュラ	積雪の多い時期に、奥山から木材を積み出す。丸太を乗せ、ワイヤーロープでしばり、馬か人が引く。雪のない時期には山の谷あいには雑木を横にして並べ、油をぬってよく滑るようにし、その上にキンマを滑らせた。
斧		メクリヨキ		メクリヨキ	ツボヨキ		猿流し(単木で流すこと)で集まった丸太を筏に組むときに、ネソを通すため繋ぎ目のサルコに穴をあける。
筏竿		イカダサオ		イカダサオ			小型の筏流しや猿流しで丸太に乗って操作しする竿。
背負縄		レンジャク				レンジャク	倒伐し枝を取り去った丸太に鋸を打ち込み、山中から荷車に乗せる場所まで引き出した。また、荷車を曳くにも使用した。
搬出用具							
掛矢		カケヤ					炭焼き窯で原木を割るときに、これで楔を打ち込む。杭を打つ掛矢では割れやすく、炭割りには使えなかった。
炭俵		シミダワラ		シミダワラ			木炭を規格寸法に切断し、同一方向に炭俵に詰め込んで出荷する。炭焼きの合間に俵編機を使用し、萱を薬縄で編んだ。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
漁撈用具							
陥穽・定置漁具							
釜		ウエ モジ モンドリ ノゾ	タケモンドリ タケノゾ	ギギウケ ドジョウウエフ ナモジ ヒガイウエ(モ ジ) ドンジョカゴ ドンジョツカミ	モジリ		琵琶湖や川、水路など魚の通り道に仕掛けて魚を捕る。捕る魚はフナ、ギギ、ドジョウ、ヒガイなどでその名を冠した名で呼ばれる(例：ギギウケ、フナモジ)。
罎釜		タツベ		コイタツベ	タツベ	モンドリ	産卵のために湖岸によってくるフナやコイを捕る。このタイプのタツベは大正5年に茨城県霞ヶ浦の漁師が伝えたもの(長谷川2006)。
蝦罎釜		エビタツベ		エビタツベ エビカゴ		モンドリ	幅0.3~0.5 cmの割竹を棕櫚縄で編み、コールトールを塗る。底はブリキ。米糠などを練った餌を入れ、延縄式に湖底に沈めてエビを捕る。
瓶漬		ビンツケ ツケビン	ビンモジ ビンモンドリ ガラスモンドリ	ビンツケ ツケビン		ドドビン	ドド(蚕の蛹)を蒸して粉碎したものをエサとして入れ、川の多少よどんだ所に沈める。頭部の紐を石などに結び、流失を防ぐ。プラスチック製もある。
鰻筒		ウナギツツ	タケツツ	ウナギツツ	ツツ		節を抜いた竹2~3本を結束する。4~11月、琵琶湖や川で水中に浸けて、ウナギが入るのを待つ。琵琶湖では延縄にした。
網釜		アミモンドリ モンドリ	アミモンドリ アミモジ モンドリアミ	カワモンドリ			3本の竹輪に網を編みこむ。両端に竹杭を付け、春に産卵期のフナ、コイを捕る。
底板		ツボイタ エリツボノソコ イタ		ツボイタ エリツボノソコ イタ			琵琶湖の定置漁具、エリのツボの底にはめる板。もともと竹箆を使っていたが、昭和60年頃から塩化ビニール製となり、現在では網を使用したアミエリが多い。
簀		エリス	エリダケ	エリス エリダケ			エリの簀。割竹を簾状に編む。コア用は棕櫚縄で目の細かい「メセキ」にし、コイ、フナ用は藁縄で編んで目の粗い「アラメ」にする。
漬欵		ツケクワ ツケカギ		ツケクワ ツケカギ	ヤス		漬柴漁で柴を上げるのに使用した。漬柴漁は柴を漬けてしばらくおき、その周りを簀で囲って中に住みついた魚を投網で捕る冬期の漁。
押網		オシアミ チョウシ		オシアミ			夜に灯火をつけ、湖岸の葦地、沼、水路などで船から水面を押し、手こたえがあると網を落して産卵期のコイ、フナを捕る。
魚伏籠		オオギ フセカゴ		オオギ フセカゴ			夜に灯火をつけ、寝ている魚の上から被せ捕る。また、溜池の水を抜き、動きづらくなったコイなどを捕る。
網漁具							
地曳網		ジビキアミ			ジビキアミ		網で魚を囲い、湖岸から網を引き寄せて魚を捕る。
鎖		クサリ コシローブ	クサリ		コシローブ		地曳き網を曳く時、鎖を曳き網にからませ、輪を腰にあてて網を曳く。
轆轤		ロクロ			ロクロ		地曳網を浜で巻取る時に使う。本体に棒を3本差し込み、3人がかりで回す。昭和40年代より機械仕掛けのウインチが主流となった。
沖曳網		チュウビキアミ		イサザアミ コイヒキアミ エビヒキアミ	チュウビキアミ		一艘の船で網を曳き、湖底の魚を捕る。主に、エビ、イサザ、スゴモロコなどを捕る。
沖すくい網		オキスクイアミ オキスクイタモ		オキスクイアミ オキスクイタモ			鉄パイプの枠に、網を取り付けたもの。船首に固定したアームに取り付け、湖上に浮遊したアユの群めがけて突進し、抄い取る。漁期は6~7月。沖すくい網は昭和53年12月頃に考案された。以前は船首に立ってタモ網ですくっていた。
刺網		サシアミ コイトアミ			サシアミ	メセイコイト アラメコイト スゴアミ ナガコイト	琵琶湖や内湖、川などに設置し、アユ、フナ、ハス、ヒガイ、モロコ、イサザ、ナマズなどを捕る。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
流網		ナガシアミ			ナガシアミ		川を横切るように網を張り、網の上下を同時にたぐりよせ、マスやハスを捕る。
張網		ハリアミ			ハリアミ		築の下流で川幅いっぱいに網を張り、築との間に溜ったハスなどを投網で捕る。張網に突当った魚は、網を持った7~8人が手で捕った。
投刺網		ナゲアミ ナゲサシアミ			ナゲアミ ナゲサシアミ		湖岸の浅瀬に群がる魚の外側へ網を投げ、小石を魚めがけて投げ、魚の逃げる先を遮断して捕獲する。ハスなどを捕る。
投網		トアミ ウチアミ			トアミ ウチアミ		網は麻糸の手編みで柿洪を施す。鉛のヒル形沈子をつける。主にコイ、ナマズを捕る。
四手網		ヨツデアミ			ヨツデアミ ヨツデモチ ヨツモチ		網はアユ用とマス用があり、網によって奥手を変える。3月から7月にはアユ漁、9月からはマス漁を行う。早朝から、船で川を遮るように並んで、魚を捕る。
蜘蛛手		クモデ			クモデ		四ツ手網の部品。桐材を十文字に組む。裏側に四方から竹をはめる溝を彫る。四ツ手網の中心部に用いる。
權		カイ バッキ		カイ	カイ		四ツ手網漁で網を水中に沈める際、川底を平らにする。
たも網		タモ タマ		ウナギタモ	テダマ		魚をすくう。ウナギタモは鰻の流し針漁の際に捕れた鰻をすくう。
		ドロモカキ		ドロモカキ ゴミカキ ドロモコジ			船に乗り、ホリや琵琶湖でゴミ(泥)掻きをする。とったゴミは田へ入れて肥料にした。
叉手網		サデ シャデ		オイモチ オイサデ	マチアミ		川の水門を閉じて下流の水位を低下させて、コイやフナをとる。
追羽根		オイバネ ウ		オイバネ	オイバネ ウ		竹の先に黒い布をつける。築に入った魚をこれで追い、四手網などで捕る。
ガバン		ガバン オイガネ	オイガネ	オイガネ	ガバン		柄は2間ほどあった。鉄部のとり付けに内側から木栓を詰める。これで音を立て、魚を刺網に追う。
浮子		ウキ アバ	ウキイタ		ウキイタ ウキ ウケンチョ		一定間隔をあけて浮子を刺網につける。浮子の大きさにより網が異なる。大はフナ網用、小はモロコ網用。
沈子		オモリ シズミ		オモリ	シズ シズミ イワ	ヘルユア	投網用の沈子。
釣漁具							
釣竿		サオ ツリザオ		ツリザオ	サオ ノベザオ リールザオ		自然竹を加工する。フナ、ハス等を釣る。リール棒が湖岸で使われるのに対し、のべ棒は琵琶湖にそそぐ河口付近の堤に突きさして使う。
		シャクリバリ		シャクリバリ	シャクリバリ		箱眼鏡でのぞきながら引掛ける。アミノウオ(ピワマス)、アユ、ハス、ウグイなどを捕る。
針籠		ハリカゴ ナガシバリ		ナガシバリ	ハリカゴ ハリコカゴ		幅0.9~1.3 cmの竹皮を外側にして、六ツ目に編み、口縁部に藁束を巻く。ウナギ、ギギの延縄漁に使う釣針と糸を入れる。




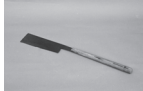






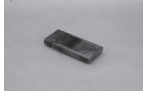







名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
突漁具							
ヤス		ヤス		ナゲヤス			長さ約2mの竹棒をつけて使用する。夜間に灯火をつけ、コイやナマスなどを突いた。
		ヤス					川で産卵のために遡上するアメノウオ(ビワマス)、コイ、ナマスなどを突いた。
水中銃		スイチュウジュウ			テッポウ		河川の土堤や石垣の中にある小魚をめがけて発射し、魚を捕る。
箱眼鏡		ハコメガネ カガミ ノゾキ		ノゾキ	ハコメガネ ミズカガミ		杉板棹の底にガラスを張る。川や葭原で魚を捕る時に水中をのぞく。
篝籠		トボシ カガリ アブリコ		トボシ カガリ アブリコ	カガリ ビダイ カガリ ピカゴ		船上で木を燃やして灯りをつけ、寝ている魚をヤスで突いたり、オオギでかぶせて捕る。
その他漁具							
蛭搔		シジミカキ		シジミトリ シジミカキ			湖底のシジミを捕る道具。
貝曳馬鋏		カイヒキマンガ	タマ	カイヒキマンガ シジミジョウレン シジミカキタモ	カイヒキマンガ ボウス イザ		貝曳馬鋏を船の両側から投げ込み、巻上機で巻きながら湖底の引きずって貝を捕る。
巻上機		マキアゲキ ロクロ		マキアゲキ マイタ	ロクロ	デデ デンデン ベベ	船のトモにつけて、貝曳馬鋏を巻きとる。
鴨猟具		トリガタ オトリ		オトリ	トリガタ		鴨のモチナワ猟で、モチナワの間に取り付け、カモの囿とした。
泥鰌踏		ドジョウフミ		ドジョウフミ ドジョウカキ	ナガジョウケ		川底を足で踏んでドジョウを笊に追い込んで捕る。
藻搔		モカキ モトリ コマザライ		モカキ モトリ コマザラエ ドロモカキ	タモ クマデ マンガ		田畑の肥料にする藻を採る。
鋤簾		カキ マエガキ				カキ マエガキ	溜池で土を掻くように手前に手繰り寄せ、魚を捕る。また、冬には堀や川岸で魚のいそうなところを木のゴミと一緒にすくう。
船・船上用具							
船		フネ		リョウシブネ カワフネ アユカケブネ	ヒラタ コブネ		各集落によって船のデザインに特徴があった。ほかに、荷物を運ぶマルコブネもある。
櫓		ロ ロウ					二つの材を三つの金輪で繋ぐ。櫓をこいで船を進める。
舵		カジ					船の舵。船によってさまざまな大きさがあった。
滑車		カッシャ セミ				セミ セビ	船の帆を吊り上げる道具。
錨		イカリ		アミイカリ ツリバエイカリ	ヨツメイカリ		船を湖上で停泊する、また網の錘として使用する。
塗取		アカトリ ツキオケ ゴイ		アカトリ	ツキオケ ツイカワ	ゴイ ゴイシャク	船にたまった水を汲み出す。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
船箱		フナバコ タンス			フナバコ タンス		ウナギ釣りの延縄の先につけるおもりの石や針の道具、財布などを入れ、船に積んで持ち歩く。船ではドウマ(銅間)に入れ、上陸する時は陸に持って上がった。釣り漁師専用。
木沓		キグツ ピコウ	キグツ		ピコウ		冬に船に乗って漁をするときに履く。キグツと足の間には打ち藁を詰め、足を固定する。ピコウは鼻高。
ガンガリ		ガンガリ				ガンガリ	竹の枝を利用する。これにロープと錘を付けて湖底を引き、湖底に沈んだ刺網や延縄を探す。
漁具製作用具							
目板		メイタ ヘラ	メイタ	メイタ	ヘラ バイ ジョウギ		網目の大きさに合う目板をゲージとして使用し、網の製作及び修理に用いる。
網針		スキバリ アミバリ		スキバリ アミバリ アミスキバリ			網を編んだり、網の破れを修復するのに使用。網目の大きさにより大小がある。
鋳型		イワツクリ		イワツクリ シズミセイサク グ			鍋で鉛を溶かして注入し、針金を通して糸通し穴を作る。
運搬用具							
生簀		イクス イクENS		イクス イクENS			網や釣りて捕った魚をこの中で活かしておく。
魚籠		ビク		エフゴ カタカケエフゴ コシツケエフゴ	ドウビン ドンベ ドウマル コシカゴ ハケゴ		腰に下げて捕れた魚を入れる。上から魚が飛び出ないように柳の木枝などを入れた。
胴瓶		ドウビン ドンベ			ドウビン ドンベ	カゴ フゴ	捕った魚を入れておく生簀として使用する。
		ドンベ ドウマル			ドウマル ドウビン ヒラドベ	ビク フゴ	捕った魚を入れておく生簀として使用する。
大胴瓶		ドンベ オオドンベ			オオドンベ		籠に縄をつけて船や杭にくくりつけ、半分以上水中に沈めて生簀として使用する。主にコアユを入れておく。
魚籠		サカナカゴ		サカナカゴ エビカゴ アユモチカゴ	マルカゴ ドウマル		捕れた魚を入れて、自宅や魚市場へ運ぶ。一籠一貫目が目安。どんな魚でも入れたが、鰻には不向き。
		エンシュウカゴ				エンシュウカゴ	鰻を入れる籠。東海地方で作られたもの。底が網代底になっている。
四手桶		ヨツデオケ			ヨツデオケ ヨツデ		四方に手の付く楕円形の桶に、竹の籬を4本はめ、口に網をつける。生きた魚を入れて運ぶ。
枡		ウリマス カイマス		ウリマス カイマス			漁業組合がシジミを売買する時に用いる枡。売り枡は買い枡より小さい。
狩猟用具							
猪突槍		ヤリ シツキヤリ		シツキヤリ	ヤリ		山の谷畑に猪追い込み場をつくり、柵の中に入った猪を槍で突く。

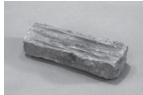




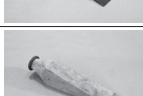






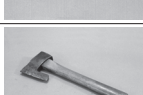

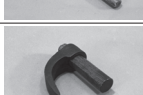



名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
養蚕用具							
飼育用具							
桑切鋏		クワキリバサミ		クワキリバサミ			桑の枝を刈る道具。
桑刈鎌		クワカリガマ		クワカリガマ			桑の枝を刈り取る、または枝を整えるときに使用。
桑籠		クワカゴ クワツミカゴ	ハゼカゴ	クワカゴ クワツミカゴ クワモリカゴ	ツボカゴ		桑の葉を摘んで入れ、家まで天秤棒で運搬する。繭を集荷場に運ぶ時にも使用した。
桑切包丁		クワキリボウチ ヨウ		クワキリボウチ ヨウ			桑の葉を細かく刻む包丁。
俎板		マナイタ キリパン					蚕に与える桑葉を刻む俎板。
給桑台		キュウソウダイ		キュウソウダイ			この上で蚕に桑の葉を与える。
蚕盆		カルトン				カルトン	ブリキ製。細かく刻んだ桑の葉を、この盆に盛って稚蚕に給桑した。
蚕蓆		カイコノムシロ		カイコノムシロ			養蚕の時、蚕座を一番下におき、上に蓆をしき、更に上に網を敷いて蚕を飼う。
蚕座		カイコダナ サンザ		カイコダナ サンザ カイコジュウ	ザル		蚕を飼育する時、この上に洗紙を敷いて桑の葉を置き、蚕を入れて繭を作る寸前まで飼育する。
蚕網		カイコアミ		カイコアミ カイコノイアミ イヤミ			壮産の蚕を上のにせて飼う。蚕のをせ、桑の葉のをせる。
暖炉		ダンロ ストーブ					養蚕時、特に春繭(ハルコ)生産のため室温上昇の必要から木炭で加温した。
上簇用具							
簇		マブシ スゴ シク					精選した藁を揃え、折たたみ機を用いて製作する。養蚕時、蚕の最終段階に簇に移し、繭を作らせる。
簇折機		マブシアミキ シクオリキ		マブシアミキ スゴシキ スゴツクリ シクオリキ オリワラオリキ			蚕が繭を作るときに使用する簇を作る。藁を上口の口から縦に差し込み、ハンドルを回すと両側に開いた器具が開閉し、中央に渡した横藁と縦藁が編み込まれて下の口から出る。
回転簇		カイテンマブシ			カイテンマブシ		ボール紙。枠は木と金具。棚は7段。この紙の中で繭を作らせる。
櫛		クシ			クシ		簇の中へ作らせた繭をこの櫛で押し出す。
毛羽取機		ケバトリキ		ケバトリキ ケバトリ カワトリキ			竹の上に繭玉のをせ、ハンドルを回転させると、繭の外側のケバがとれる。
繭笊		マユザル		マユザル			繭の選別に使用した。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
蔦籠		マユカゴ		マユカゴ	オオカゴ		蔦を入れて出荷する。
紡織用具							
製糸用具							
糸取機		イトトリキ		イトトリキ イトヒキダルマ	イトヒキダルマ		蔦から糸をとる道具。焔炉に鍋を置き、湯を沸かして蔦を入れる。上の糸枠に絹糸をまきとる。 木製の蔦車がダルマに似ているため、ダルマと呼ばれた(山東町1988)。
真綿枠		マワタワク					真綿を引きのばしてかける枠。
紡績用具							
麻蒸桶		アサムシオケ		アサムシオケ			上下とも開いた桶。麻を蒸す際に鍋の上ののせる。
苧扱箸		コキバシ		コキバシ			灰汁炊きした麻苧の外皮をとる道具。竹製。主に高島市朽木周辺で使用される。
苧扱刀		カキボウチョウ		カキボウチョウ			麻の茎を乾燥させ、その後蒸して皮を剥き、これで外皮を削り取る。
苧桶		オオケ オボケ		オボケ オオケ オナベ オウミカタミ ウミオケ			女性が麻糸を績む時に、績んだ麻糸を入れる桶。米原市甲津原では六ツ目の竹籠を使用してオウミカタミと呼んでいる。また、夜に女性が集まって苧績みすることをオナベという。
綿繰機		ワタクリキ ミクリ		ワタクリキ ミクリ		メクリ	綿から種を取り除く道具。兵庫県加古川市、愛知県などで作られたものが搬入されている。
機織用具							
糸車		イトグルマ		イトグルマ イトヨリグルマ ツムギダルマ	ツムギダルマ	ビービー ブイブイ	麻や綿から糸を紡ぐ道具。使用時の音からビービー、ブイブイとよばれる。甲賀市では竹を車輪状に組んだものもある。
総車		カセクリ		カセクリ カセツクリ カセカケ イトクリキ	カセグルマ トケイガセ		糸車でヨリカケした糸を認にする。蔦車で回数か数えられるものがあり、トケイガセと呼ばれている。
糸繰		マイバ		イトマキ イトクリダイ	マイバ		糸を糸枠に巻き取る際に認をかける道具。麻糸をかけるものは大型である。
綜割		イトマキ フワリ		イトマキ	マイバ マイハノカラス		糸を糸枠に巻き取る際に認をかける道具。高島市ではマイハノカラスという(朽木村1974)。
糸繰		イトクリダイ		イトクリダイ	イス		糸を糸枠に巻き取る。
座繰		イトクリキ イトマキキ		イトクリキ イトマキキ	ザクリ カラクリ		糸を糸枠に巻き取る道具。
糸枠		イトワク イトマキ		イトワク イトマキ	ワク コマ		糸を巻いておく道具。
経台		ヘダイ		ヘダイ ハタヘリキ イトタテ			経糸をそろえる道具。家の二ワ(土間)や座敷のデイからザシキまでかけて張った。
地機		ジバタ シモバタ		シモバタ ノノバタ	ジバタ シモバタ イザリバタ	キャハタ チャンチャンハ タ	麻布をノノといい、ノノを織る機をノノバタという(朽木村1974)。高島市ではキャハタ、チャンチャンハタという(民具1984)。
高機		タカハタ カンバタ		タカハタ カンバタ ホンバタ キヨウバタ		チャンチャンハ タ	農閑期などに平織りの木綿布を織った。できた布は野良着や布団地に使用した。
綜統		カザリ					高機の綜統。











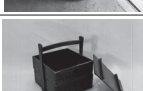







名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
糸巻機		イトマキ		イトマキ			麻糸をヘソにする道具。ヘソとは中心に竹管を入れずに麻糸だけで巻き、織るときには内側から糸を出して織った。
手工用具							
藁選り		ワラスグリ		ワラスグリ			稲藁の根部の茎を包む葉を梳き取る。
千歯扱		ワラスグリ ワラマンガ		ワラスグリ ワラマンガ	ワラマンガ		稲藁の根部の茎を包む葉を梳き取る。
横槌		コヅチ ヨコヅチ	キヅチ		コヅチ ヨコヅチ ツチノコ		藁を打って柔らかくする。また、脱穀などにも使う。
藁打機		ワラウチキ		ワラウチキ			縄や筵を製作する時に藁を打つ道具。
縄綯機		ナワナイキ		ナワナイキ ワラナイ			藁台を差込み、漏斗から藁を挿入し、足踏み板を踏むと、木製ドラムが回転し縄が綯われる。
草鞋作台		ゾウリツクリダイ ゾウリアミダイ		ゾウリツクリダイ ゾウリアミダイ ワラジアミ			藁草履を編む道具。
俵編機		タワラアミダイ コモアミ		タワラアミダイ タワラアミキ コモアミ		コカシマタ コンバシマタ	米俵、筵、弧を作る道具。足を立てて竿を渡し、竿の上に藁を置き、槌に巻いた細縄を交差させて編む。 高島市ではコカシマタ(大塚清1980)、コバシマタ(県教委1982、朽木村1974)という。
槌		ツチノコ オモリ		ツチノコ オモリ			俵編機で俵や弧を編むときに細縄を巻く槌。槌を交差させて編む。
筵機		ムシロオリ ムシロバタ		ムシロオリ ムシロバタ ハタゴ ツンダワラオリ			筵を織る道具。二人用。
箴		オサ			オサ	トントン シャックリ	筵機の箴。箴と開口具を兼ねる。
諸職							
船大工用具							
墨壺		スミツボ		スミツボ			船板に寸法を墨付けするのに使用する。長い直線はツボキリを立て、滑車の糸を延ばし、指先ではじいて墨をつける。
墨差		スミサシ		スミサシ			竹の先を薄く細かく割ったもの。板図の作成、船板や釘穴の位置の墨付に使用する。先を墨壺の墨肉につけ、曲尺に添えて直線を引く。
曲尺		カネザシ サシガネ	カネザシ サシガネ			オレガネ	造船の基本的な計測に使用する。戦前は真鍮製でもっと厚かった。かつては年1回検査を受けなければ使えなかった。
		クセガネ	クセガネ			クセガネ	ホテ(面木)などの角度や勾配を測るのに使用する。かつては木製で船大工が自作したが、現在は金属製で市販されている。
罫引		ケビキ ケイビキ		ケビキ ケイビキ			板の縁から一定の幅で線を引く道具。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
鋸		マエビキ コビキノコ		マエビキ コビキノコ			船材の原木を筏に組んで造船所内へ運び、この鋸で製板する。
		ガンドウタツビ キ		ガンドウタツビ キ	ガンドウタツビ キ		丸太を切断する。
		タテビキ		タテビキ			板材に墨を打ち、裁断する。シキ、平板、ホテなどの船板を切断する。
		ヨコビキ		ヨコビキ			船材を切断する。
		スリノコ		スリノコ スリノコギリ			船板の接合面をスリノコで挽き、繊維質を壊して、より密着させて浸水を防ぐ。
		ハメヒキ		ハメヒキ			銅板を差込む溝を切る。
		ヒキマワシノコ		ヒキマワシノコ			修理などで木を入れるときに、まず錐で穴を開け、ヒキマワシノコで切抜く。
槌		サイズチ コツチ			コツチ		タケベラをサイズチで打ち、板の隙間に横縄を打込む。
鉋		ヒラカンナ			ヒラカンナ		平板やホテなどの仕上げに用いる。
		マルカンナ			マルカンナ		刃側の台木を丸くする。板の端など丸く削る。または丸い溝を削る。
		ソリダイカンナ		ソリダイカンナ ソリダイ	シホゾリ ハンゾリ		平板やホテなどの仕上げに用いる。
		メントリカンナ		メントリカンナ			板材の角を斜めに削る。
鑿		タタキノミ		タタキノミ			金槌で叩いてクイメを切る。
		マルノミ		マルノミ			入木をする時に使用する。
		ツバノミ		タマリツバ カガミツバ スグミツバ	コグチツバ		船釘を打込む仮穴をあける。
竹筥		サキヤリ ヤトク	タケベラ カネヤトク	サキヤリ ホウコンウチ			板の隙間に横縄を入れる作業をホウコン打ちという。その際にサキヤリで板の隙間を明け、ヤトクで横縄を押さえてサイズチで打ち込む。
錐		キリ ボルトギリ		ボルトギリ			穴を開ける道具。柄の片方を細くして真中あたりで止まるようにする。
船釘		フナクギ		フナクギ ヌイクギ シキクギ ヘイタクギ ホテクギ			船材を止める釘。







名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
鋸		カスガイ				カイカイ	板と板を合わせるのに使用。船大工だけが使う。
銅板		ドウバン アカイタ	ドウバン		アカイタ		船板の接合面の上に貼り、打った釘を保護する。
槓縄		マキナワ マキハダ	マキナワ マキハダ				槓の皮を熱ったもの。板の隙間に入れて、水の浸入を防ぐ。
鍛冶用具							
鞆		フイゴ					鍛造、火造り、焼入れなどの作業で使用。把手を足の指にはさんで動かして風を送り、炭火をおこして火力を高める。「足で火を吹く」といった。
椅子		イス		ケツダイ	イス		鞆を使用するときに坐る椅子。座布団を敷いて使用した。
火箸		ヒバシ		ヒバシ			鉄製。焼入れや火造りのときに炭火をかき混ぜるのに使用。
金床		カナトコ	カナトコ	オモドコ、エンバ			鍛冶場に穴を掘って埋め、鍛造、火造り、焼入れなどに使用した。
火箸		ツカミハシ		ツカミハシ			鋸材を火中へ入れるとき、これではさむ。
鎚		ムコウツチ		ムコウツチ	オオツチ		鋸の幅に合わせて鑿を当て、ムコウツチで打つ。
旋床		セントコ		セントコ ケンマダイ			少し傾斜をもたせて板を地面にL字釘3本で固定し、これに平らな厚板を重ねて床とする。すき工程で旋を使うときに使用。
挟み板		ハサミイタ メタテダイ		ハサミイタ メタテダイ			2枚の板をボルトで締める。目立てをするときに鋸を挟む。
旋		セン		アラゼン センメシタ センメ	ダイゼン チュウゼン		鋸の表面を平らに削る道具。鋸鍛冶では、アラゼン→ダイゼン→チュウゼン→センメシタ→センメの順にかけ、表面をならす。
鑿		タガネ					厚さ3mmの鋼板を鋸の寸法に合わせ、ムコウツチで打ち切断する。
木地屋用具							
轆轤		ロクロ					足踏式一人挽轆轤。移動用。高島市朽木では二人用の轆轤をツナビキという(県教委1969)。
馬		ウマ					轆轤で木地を削る際にカンナを固定する。
鉋		カンナ					木地鉋。
		キサギ					角をとるのに使用。
鑿		ノミ					大きな鉢や盆の内割りに使用する


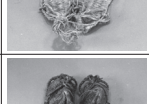


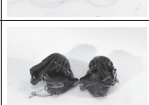




名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
砥石		ミゾト		ミゾト			砥石。鉋の先を研ぐ。
椀		ツボワン			ツボワン ツボ		木地椀。
		ヒラワン			ヒラワン ヒラ		木地椀。
		ヨツガサネ			ヨツガサネ		木地椀。
柄屋用具							
袋矢		フクロヤ	カナヤ				木矢に鉄製の刃先を付ける。鋤、鉋の柄用に檜の立木を伐採する際に使用。木に打ち込み、倒す方向を決める。
木矢		キヤ					鋤、鉋の柄用に檜の立木を伐採する際に使用。木に打ち込み、倒す方向を決める。
玄翁		オオゲンノウ					鋤、鉋の柄用に檜の立木を伐採する際に使用。木に鋸目を入れ、袋矢や木矢を打ち込む。
鋸		ガンド					鋤、鉋の原木である檜の木を伐採する際に使用。明治30年頃に製作。
鉋		イシツキナタ					伐採した檜の木の小枝を落とすのに使用。
鷹口		トビ			キリントビ		鉄製の刃先に檜製の柄を付ける。柄は自家製。刃先は土佐国刃物鍛冶が製作。伐採した檜の木を集荷し、運搬する時に使用。
物差		ニケンサシ					樺製。2つ折り。伐採した檜の木を2間の長さに切断して運搬する。
墨壺		スミツボ					檜の原木に墨付けする際に使用。スミツケができるまでに10年の年期がかかり、これができるとう一人前といわれた。
手斧		テオノ			テオノ		北方鋤(キタカタスキ)の裏を荒ハツリするのに使用。
		ヒラチョンナ			ヒラチョンナ カタテチョンナ		大きな鉢や盆の内剝りに使用する
鋸		ウスクリチョンナ		ウスクリチョンナ			樺の原木を剝り、臼にするときに使用。
		アリノコ		アリノコ			風呂鋤の刃を差し込む溝を掘る、または溝の仕上げに使用。溝をアリと呼ぶため、「アリキリの鋸」「アリノコ」と呼んだ。
		ヨコビキガンド		ヨコビキガンド			鋤、鉋の原材料の木を切断するのに使用。
		エマガリガンド			エマガリガンド		鉋の原木を縦に挽く、鉋の柄を細工するなどの時にタテビキに使う。







名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
セン		セン		イトセン ヒラセン			鋤の表側の鼻先をならす。また、鋤の裏側の曲がりを作る。
鑿		ノミ		ヒラノミ イチブノミ スンノミ			鋤のカナサキを入れるホヅ(溝)を作る時に使用。
その他の諸職用具							
桶沓		オケグツ		オケグツ オケナンバ	オケグツ オケナンバ		ヨシを刈るときに履く。
屋根叩		ヤネタタキ		ヤネタタキ ウンツク タタキボウ ワラオン	ツチノコ		木に階段状に刻みをつける。草葺屋根の差し替えをする際、これで叩いて入れる。
鋏		ハサミ					茅葺屋根の葺き替えや補修の時に茅を切り揃える。
運搬用具							
背駄		セタ オイコ			セタ セイタ オイコ		荷を縛りつけ背負う運搬具。山や田畑へ行く時に使用し、稲、薪、柴、炭などを背負った。重い物は台や土手などの傾斜を利用して背負った。
息杖		イキツエ		ニツエ ニンボウ ネンボウ ツッカエボウ			セタを背負うときに使う。荷物を持ち上げるときや途中で荷物をのせて立ったまま休憩するのに使用した。
担股		オイネ キシユマタ		オイネ	キシユマタ		木炭の原木を切って、炭窯までの山の急な斜面や道のない所を運ぶ時にこの上に木をのせてかついだ(中京大1977)。
背中当		セナカアテ		セナカアテ タゴモ タマゴ オイヅル	キゴモ		打ち藁とボロギレを麻紐で編む。俄と同じように編んだ。山で刈ったホドを背負ったり、田で刈った稲を畦から荷車の通る道へ出すときに背につけ、オйнаワで縛って背負う。高島市マキノ町では、男性は長いヒゲキンゴモ、女性はボウサンキンゴモを使用した(県教委1982)。
背負縄		オйнаワ オイネナワ ショйнаワ		オйнаワ オイネナワ ショйнаワ			シナ製の炭の原木などを背負い、ワラ製は稲、草、薪などを背負うのに使用(高島市朽木麻生)。
天秤棒		ボウ テンピンボウ		ニナイボウ コエボウ ワラテンピン	テンピンボウ		畚や籠などを提げて運搬する。農作業、買い物、行商などで荷物を担ぐのに使用。
突棒		トガリボウ ツクボウ		ツクボウ ヤマボ	トガリボウ トガシボウ		藁や柴などを突棒に突き挿して運んだ。
畚		ニナイワク モッコダイ		ニナイワク		モッコ モッコダイ セツタ	寺で講をする際に鍋敷を敷いて鍋をのせ、汁とご飯を運んだ。また、行商に出る際に籠や箱を台の上におき、天秤棒で担った。
		モッコ		マヤゴエモッコ			重いものを二人で運搬する。また、狭い厩から堆肥であるマヤゴエを運び出すために使用した。両側から二人で運ぶことをナカドリ、サシアイなどといった(八日市市1986)。
		タス					山林で松葉や落葉を熊手でかき集めて中に入れ、山から降ろす。
		モッコ フゴ テゴ		コクソテゴ ショウガテゴ			天秤棒で担いで品物を運搬する。コクソは蚕糞をいう。
		フゴ テゴ イジコ		モミテゴ	ヒゲコ ヒゲナシ ツンダメ	ビク	稲籾、玄米、精白米、大豆、小豆、菜種などをに入れて運ぶ。天秤棒に吊り下げる長い持ち手があるものをヒゲコ、持ち手が短いものをヒゲナシという(武蔵大1989)。
		フゴ テゴ		ショイテゴ			山仕事等に出る際に、弁当や道具を入れるのに使用。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明	
畚		フゴ テゴ		クワテゴ クワテンゴ			養蚕用の桑葉を入れて運ぶ。テゴ一つに桑が約10貫目入った。また、糠を捨てる時にも使用した。天秤棒で担ぐか大八車に乗せて運んだ。	
		フゴ テゴ ビク		ヤマキフゴ ベントウフゴウ ベントテンゴ			田畑に耕作に行く際に弁当を入れて運ぶのに使った。	
編袋		スカリ			スカリ		主として製炭・造林・育林・伐採などの山仕事の際に昼弁当(メツと呼ぶ曲げ物に詰めた)を入れ、道具や背負い荷に括りつけた。	
籠		バイスケ				バイスケ	土や砂を運ぶのに使用。天秤棒の前後にかけ、担ぐ。	
		マイラセカゴ センバカゴ カチカゴ		マイラセカゴ センバカゴ カチカゴ		シンドウカゴ	天秤棒で担いで野菜や荷物を運ぶ籠。魚の行商人をセンバという。農村から作物を売りに来る籠をマイラセ、野菜の運搬用をハイタという(八日市市1986)。	
		ツボカゴ				ツボカゴ	オハラカゴ	イタヤカエデやイロハモミジで作る籠。長浜市余呉町丹生谷北部のみで生産し、特に小原で製作したため、オハラカゴという。
		ツルワテゴ ネソカゴ	ツルワテゴ ネソカゴ アケビカゴ ツヅラテンゴ					山地に自生するツルワフジ、アケビ、ツヅラフジなどで編んだ籠。山野を歩く際、腰につける。ゼンマイ、ワラビなどの山菜や栗、栃などを採集して入れたり、小豆、黍、粟などを入れて軒先などに吊しておく。
		ヤミカゴ			ヤミカゴ ビールカゴ			物品の運搬に使用。ビールを運搬したため、「ビールカゴ」とも。戦時中から戦後にかけて物資不足と統制により、公定価格外で物品を売買したので、これを闇値といい、闇物資を運搬したため「ヤミカゴ」という。
		テカゴ			ハナツミカゴ	テカゴ		物を入れて運搬、収納、保管する。柿の実、洗った小芋、豆、弁当などを入れて運ぶ。また、天井に吊って保管する。また、草津市周辺で青花紙用の青花を摘んで入れるものをハナツミカゴという。
		ヤマカゴ コノハカゴ			ヤマカゴ コノハカゴ クサカリカゴ	セオイカゴ		山で木の葉を拾ってくる籠。
岡持		オカモチ タジ					仕出しを持って、注文主宅へ行く時に使用。手で提げて持って行く。	
手鉤		テカギ					鉄製の鉤先に杉製の柄を付ける。俵や手荷物などを引っ掛けて運ぶ。	
風呂敷		フロシキ	イッタンフロシキ		イッタンフロシキ		一反の布をつないだもの。藍染した布を4枚縫い合わせる。七子重の一番大きいものを包むのに使用。	
袋		アサブクロ ハッシャクブクロ	アサブクロ		ハッシャクブクロ		麻製。幅一尺に対して八尺の長さの麻布を使うことからハッシャクブクロという。白米や玄米を入れて背負う。補強のために柿渋で染めることが多い。	
大八車		ダイハチグルマ			トンボグルマ		稲や薪など重いものを運ぶ。前部左側にある握り手を梶棒と言い、荷物をバランス良く積んで梶棒を右手で持つ。右肩へ肩ひもをかけ、肩の力で車を前進させる。	
リヤカー		リヤカー					物品を運搬する。大八車、牛車、馬車に比べ積載量は少ないが、人力のみで使用できた。	
蓮台		レンダイ					人や病人などを寝かせたまま運ぶ。	
田馬		ウマ		タウマ			松製。湿田で刈り取った稲束をこの「ウマ」に積んで運搬する。ソリの形をしているのでどちらからでも押すことができる。	

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
田舟		タブネ		タブネ			湿田で秋の稲刈りの際に刈り取った稲を運ぶのに使用。また、田植え時に苗を積んで運んだ。地元の船大工が製作。
		ドブネ		ドブネ			木製。湿田で低くなったところへ土を運ぶ。
鞆		バスケット リョコウカバン		リョコウカバン	バスケット		旅行の際に携行品や土産物などを収納し、鍵をかけて名札をつけ、持ち歩いた。
交易用具							
帳場用具							
銭箱		キンコ ゼニイレ ゼニバコ		ゼニイレ ゼニバコ			小銭を入れて、金庫として使う。鍵がかかるようになっている。
帳場格子		チョウバコウシ ケツカイ		チョウバコウシ ケツカイ	チョウバコウシ		来客と帳場の間に置いたもの。結界は、仏教で現世と浄土、仏と信者を区別するものであるが、これを商いの聖域である帳場に使用するようになった(五個荘町1990)。
銭差		ピタセン					寛永通宝をまとめたもの。
計算・計量・測量用具							
棹秤		サオバカリ カンカン ツリバカリ			サオバカリ ツリバカリ	カンカン	米、茶、麦、芋などの計量に使用した。
扛秤		チギ				チギ	家業の糸織りで、絹糸を量るのに用いた。
枧		マス		イッシュウマス			主に米の計量に使う。
		トマス		モミマス			米一斗が入る枧。実際は籾殻の分を見込み、一合くらい多く入る。近代以降は円形の枧となる。
衣							
被り物							
編笠		アミガサ イガサ	イガサ	ヒオイガサ	アミガサ		藁草製のため、イガサという。主に女性が農作業の際に日除けのために被る。田植え時には赤い紐をつけた。
檜笠		ヒノキガサ	ヒノキガサ		アジロガサ		檜を薄く削り、網代状に編む。農作業時や雨天に被る。
竹皮笠		タケノコガサ バッチガサ	タケノコガサ タケノカワノカサ			バッチガサ バチガイガサ ナタエバチ イタガサ	竹を薄く剥ぎ、縦軸の型をつくり、その上に竹皮を張り、上から竹籤で押えて糸で縫いとめる。男女とも雨天や日除け、道中笠として使用する。バッチとは番匠(大工)が訛ったもの(長谷川2006)。
菅笠		スゲガサ	スゲガサ		マルガサ ツマオリガサ		菅製。男女とも雨天や日除け、道中笠として使用する。若い女性はツマオリガサを被った(甲賀市土山町大内、関大1979)。新婦の紐は赤木綿を使い、結婚した年の田植え前に夫が妻に送る習慣があった(東近江市蛇溝町)。
饅頭笠		マンジュウガサ			マンジュウガサ イリナバガサ		竹を網代に編んで作る。内側に紺和紙、渋紙をはさみ、竹に藁を巻いた頭座を付ける。僧侶の旅笠。雨用。
帽子		ボウシ	ムギワラボウ	トリウチボウ	ナカオレボウ ヤマタカボウ	シャッポ カンカンボウ バナマボウ	男性が外出するときに被る帽子。ムギワラボウ、カンカンボウは麦藁製、ナカオレボウ、ヤマタカボウはフェルト製。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
手拭い		テヌグイ		ユテ			頭に巻いて使う。男性はネジリハチマキ、又はホッカブリ、女性はアネサンカブリにする。米原市では手拭いかぶりをミソダマ、風呂用はユテという(伊吹町1994)。
頭巾		ズッキン ダルマ		アタマオオイ クビマキ	ダルマ	ケトン	冬期に防寒のため、大きな布を頭から巻いた。ダルマは綿やネルの布を、顔を出す部分をあけて縫ったもの。降雪時に男女とも使用した。
着る物(上衣)							
晴着		ハレギ ヨソイキ		ハレギ ヨソイキ レイフク	モンツキ	イチチョウラ	ハレの日に着用する衣服。冠婚葬祭、正月、報恩講などに着る。
普段着		ツネギ フダンギ		ツネギ フダンギ ツネノキモノ	ナガギ	ベベ	日常に着用する衣服。仕事着より身丈や袖が長い。新しいうちは普段着にし、古くなると仕事着にした。単衣、袷、締入がある。
仕事着		シゴトギ ノラギ		シゴトギ ノラギ ヒャクショウギ ヤマギ			労働時に着用する衣服。仕事別にタイキ、ヤマイキ、ウミイキといった(長浜市菅浦)。
(男性)		ハンテン ドウギ		ハンコ ハンテン	ドウギ ドンブク ツツポ テボソ アツシ	ドンザ コンナシ コウベニ	袖の形からツツポ、テボソという。甲賀市土山町大河原では、藤製で藍染のものをコンナシ、藍染でないものをコウベニという(関大1979)。
(女性)		ヒツバリ			ヒツバリ ハンギ	テナシ	ヒツバリは前に紐がついており、下にモンベをはく。米原市甲津原ではテナシ(膝丈)、ハンギ(腰丈、下体にノバカマを着る)の区別がある(滋賀県1974)。
袖無		デンチ デンチコ				ソデナシ デンチ デンチコ チャンチャンコ	オデンチともいう。県内全域ではデンチ、湖南ではデンチコが多い(民俗地図)。子供用はチャンチャンコ、ソデナシという(栗東1994)。
裂織		シャクリ サククリ			シャクリ サククリ		裂織が訛ったもの。柴、藁等を背負うときやセタを背負うときに着る。夏期に山に入るときには裸の上に直接着た。長浜市北部でのみ使用。
着る物(下衣)							
股引		バッチ モモヒキ		ユキバカマ	ハンバッチ タツツケ	カルサン	農作業や山仕事の際に日常的に着用。足元は地下足袋と脚絆により土や泥水の浸入を防いだ。県北部ではモモヒキ、南部ではバッチが多い。高島市朽木ではカルサン、米原市甲津原ではユキバカマ、甲賀市土山町ではタツツケ(民俗地図)。大津市堅田では刺子をボッコといい、丹念にボッコを入れたバッチを外着用としてはいた(県教委1980)。
モンベ		モンベ			ハンモンベ ミジカモモヒキ		田、畑、山林の農作業時にはいた。また、屋内で普段着としても使用した。
腰巻		コシマキ ユマキ		コシマキ(オコシ) ユマキ (イマキ、オイマキ)			女性の下着。若者は赤やピンク、年寄は白を使用する。
褌		フンドシ マワシ			ロクシャクフンドシ モッコフンドシ	エッチェウフンドシ	男性の下着。
甲脚絆		コウアテ コオキヤハン		コウアテ コウキヤハン			山道を歩くときに足の甲の上にはき、その上から草鞋をはく。草鞋の紐ずれをなくし、脚半と共に足の甲を保護する。
脚絆		キヤハン キハン ケハン		ミチユキキヤハン			農作業の際に足に巻いて泥除け、虫除けに使用する。
脛巾		ハバキ			マキキヤハン		農作業や山仕事のときに脛に巻く。主に男性が使用した。藁、蒲、科、藤製がある。
シャツ		シャツ ジュバン					男性が仕事着の下に着る。大正時代頃からシャツになったが、それ以前はジュバンを着た。









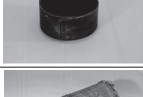

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
裂織		タビ					現在の靴下がわりに使用。
履物							
高下駄		タカゲタ			タカゲタ チュウゲタ ツマカケ コウカケゲタ		タカゲタは雨や雪の時に使用。
低下駄		ヒクゲタ リキュウゲタ			ヒクゲタ ナカザシ リキュウゲタ	ドジマ ブクリ	余所行きに使用する。
草履		ゾウリ ジョリ	ワラゾウリ	カミゾウリ	オプトゾウリ ナガゾウリ	ジョジョ	外出や農作業のときに履く。オプトゾウリは鼻緒に白い紙を巻いたもので、祭りの際に使用した。
足半		アシナカゾウリ トンボゾウリ			アシナカゾウリ トンボゾウリ		農作業や漁にでるときに使用した。東近江市永源寺ではマムシに咬まれなといった(県教委1966)。
草鞋		ワラジ ワランジ	ワラジ ワランジ	オトコワラジ オナゴワラジ カミワラジ	ヒメワラジ チチワラジ オフトワラジ	ゴンゾワラジ	山仕事に行く時や遠方に行く時に履いた。4乳が多いが、2乳のものもあり、オナゴワラジという(伊吹町1994)。また、乳のないワラジをゴンゾワラジという。
爪皮		ツマゴ ツマガケ		ユキワラジ クツゴメ	ツマゴ ツマガケ ツマグツ ショウガグツ		藁を麻で編んで作る。上から草鞋を履く。積雪時にはく。軽くて、氷結面でも滑らず、深い雪道でも沈まなかった。
藁沓		ワラグツ ユキグツ	ワラグツ	ユキグツ フミコミ	フカグツ アサグツ		積雪時に履く長靴。フミコミは上部に切込みがあり、足に縛り付けることができるため、山仕事に使用した(伊吹町1994)。
標		カンジキ カンリキ					雪道を歩く際に藁沓の上から付けた。
靴		キンチャクグツ	シシグツ シビグツ		キンチャクグツ ツナスキ ソウビョウグツ アトビョウグツ	ハチマングツ チョウセングツ	主に牛革で作られ、靴底に鉄の鋸が打ってある。船上で漁をするときや雪中を歩くときに使用した。中に藁(シビ)を入れると暖かったという。近江八幡市で製作していたため、ハチマングツと呼ばれる。
化粧・結髪							
鏡		カガミ			エカガミ		柄のついた鏡。
鏡箱		カガミバコ カガミイレ		カガミイレ	カガミバコ		柄鏡を入れる箱。
鏡台		キョウダイ			キョウダイ		化粧道具、髪飾りなどを入れる。婚礼道具の一つ。
耳盥		ミミダライ オハグロタライ		オハグロワ オハグロダライ	ミミダライ ハンゾ		お歯黒をする際に使用した。
洗濯・裁縫							
洗濯板		セントクイタ	セントクイタ	セントクイタ			板の刻み目で衣類をこすり、汚れをとる。
盥		タライ セントクダライ		セントクダライ			洗濯の際に使用する盥。婚礼時に持参する。産湯に使い、その後洗濯用に使った。
砧		キヌタ ヨコヅチ コヅチ			ヨコヅチ コヅチ	キヌタ	着物などを糊付けした際に皺を伸ばすためにこれで打った。また、台をキヌタという(五個荘町1990)。





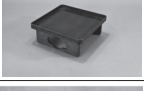
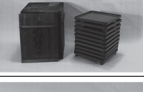

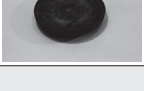




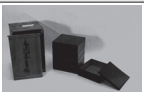





名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
叩き台		タタキダイ キヌタ		タタキダイ		キヌタ	キヌタとセットで使う木の台。
張板		ハリイタ	ハリイタ				着物の仕立直しの際に洗濯した布に糊をつけ、張板に張りつけ、皺を伸ばした。 湖北では婚礼道具の一つとして、必ず張板を持参したという。
伸子針		シンシ シンシバリ		シンシ シンシバリ ユノシバリ ユノシハサミ ヌノハリシンシ			布に糊をつけ、両端を棒で固定し、皺にならないよう伸子を弓状に張り、天日干にした。夕方、砵でもう一度たたいた。
鍔		コテ ヤキゴテ		ヤキゴテ			先端の三角形の部分を火鉢の炭火の中に入れ、数分間熱し、布や紙、紙幣の皺を伸ばした。
火熨斗		ヒノシ ヒオコシ		ヒノシ ヒオコシ			中に火のついた炭火を入れ、その熱を利用し、皺を伸ばす。
アイロン		アイロン		キズミアイロン スミビアイロン			中に炭火を入れ、布の皺を伸ばす。
紵台		クケダイ		クケダイ			和裁の際に布を引っ張るのに使った。クケるとは縫い目が表に見えないように縫うことをいう。
裁縫箱		サイホウパコ アマダイ ハリパコ		サイホウパコ アマダイ ハリサシ ハリパコ			針仕事の道具を入れる。針仕事でクケたりシツケたりする時に使った。






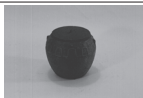




食














貯蔵用具							
戸箱		トバコ ネズミイラズ		ネズミイラズ ネズミラ	トバコ		土間や台所に備え付け、米などを貯蔵する。鼠害を防ぐために使用した。
米櫃		カラト		コメイレ ニトバコ		カラト	精米した米を貯蔵する。
飯巻		フゴ イジコ		メシフゴ ヒツフゴ ハンビツ	ダルマフゴ		ご飯を飯櫃に移し、畚の中に入れて冷えないよう保温する。
飯櫃		メシビツ オヒツ		メシビツ ハンビツ	ヌリビツ ハンボ		炊き上った飯を入れておく。
醤油甕		ショウユカメ ショウユダル		ショウユカメ ショウユダル	ショウユカメ ショウユダル		醤油を入れる容器、または運搬容器。醤油を醤油屋より購入した際に使用したもの。
栓		ノミ					醤油樽や酒樽の口に取り付ける。
鮎鱈桶		フナズシオケ スシオケ		フナズシオケ スシオケ			鮎鱈を漬ける桶。
味噌桶		ミソオケ ミソダル		ミソオケ ミソダル			味噌を貯蔵するのに使用。
炊事用具							
水甕		ミズガメ		ミズガメ			台所の水屋の横に置き、井戸や川から汲んだ水を入れる。
角桶		ツノオケ ミズオケ		ミズオケ	ツノオケ		飲み水を汲み置きする。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
手桶		テオケ チョウケ		ミズオケ	テオケ チョウケ		井戸や川から水を汲んで運ぶのに使った。
片手桶		カタテオケ		カタテオケ カタテ			昭和30年頃まで掘り井戸が各家にあり、その水を汲むのに使用した。
柄杓		ミズシャク		ミズシャク			飲料水の汲み上げに使用した。
米研桶		カシオケ		カシオケ ユオケ			米を研いで水につけることをカスという。年末に餅米を洗う、味噌作りの大豆を水に浸す、冠婚葬祭の飯米洗いなどに使用した。
笊		ザル ショウケ	タケザル	コメアゲ コメアゲショウケ	クチアゲショウケ		米を洗い水を切る笊。円形のものもある。
碗籠		ワンカゴ	ザルカゴ	ワンカゴ アライアゲザル アゲザル チャワンアゲ	テカゴ		蔓製。食器を伏せて乾燥させる。
羽釜		カマ ハガマ オオカマサン			ハガマ オオカマサン		飯を炊く。ハッショウガマはご飯、ゴショウガマはおかず、サンショウカマはお茶を沸かす(八日市市1986)。大釜は冠婚葬祭などで使用するが、日常は使用せず竈に据えて竈神を祀る。
鍋		ナベ	テツナベ	シルナベ	ハソリ		大鍋は味噌作りなどに使用。通常の鍋は飯、味噌汁、煮物などに使用した。容量別にサンショウナベ、ゴショウナベなどともいう。一斗入りはトナベという。
炒鍋		イリナベ ホウラク			ホウラク ホウロク ホウライ		竈にかけ、米、大豆、麦、胡麻、餅、アラレ等を炒る。陶器もあり。
鍋		スキヤキナベ ジュンジュンナベ		スキヤキナベ チャンナベ ジュンジュンナベ	ヒラナベ		煮物用鍋。すきやきをジュンジュンといい、鯰、鰻、鶏肉などをすきやきにする。
胡麻炒		ゴマイリ		ゴマイリ			洗い胡麻を入れて、ゆすりながら煎る。陶器製もあり。
行平鍋		ユキヒラ				ユキヒラ	粥を煮る、牛乳を温めるなど、弱火で長く熱する場合に使用。
茶釜		チャガマ ユガマ		チャガマ ユガマ			竈にかけて湯を沸かす。
鍋敷		ナベシキ カマシキ スイワ		ナベシキ カマシキ	スイワ		鉄鍋や鉄釜は底がまるく、坐りが不安定なため、鍋敷を使用して安定させた。
鍋掴み		ナベツカミ		ナベツカミ			打藁を二つ折りにし、科の縄で編み、つないだもの。竈から熱い鍋を下ろす時に使用。
杓子		シャクシ シャモジ		シルシャモジ		オシャモ	囲炉裏の自在鍵にかけた汁鍋の味噌汁を回りにから各自すくい取るのに使用。
杓文字		シャモジ					ご飯を茶碗によそう。
鉄瓶		テツビン	テツビン				湯を沸かす。火鉢に終日かけて湯を沸かし、お茶を入れる。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
薬缶		ヤカン		ヤカン ヤッカン		チャンヌリ テンドリ	山仕事に出た時に焚き火をして湯を沸かす。家の中ではイロリの五徳の上に置き、湯を沸かすこともある。
蒸籠		セイロ コシキ				セイロ コシキ	餅をついたり、おこわを作ったりする時にもち米を蒸す。四角いものと丸いものがある。
調理・加工用具							
包丁		ホウチョウ ナガタ					近江八幡市沖島では、魚用の出刃包丁をホウチョウ、野菜を切る包丁をナガタという(県教委1980)。
俎板		マナイタ キリバン		マナイタ	キリバン キリバ		近江八幡市沖島では、魚用をマナイタ、野菜用をキリバンという(県教委1980)。
半切桶		ハンギリ ハンボ		ドジョウオケ	ハンギリ ハンボ	タライ	鮓を作る時に酢と飯を混ぜるのに使用した。また、糺摺り時に使用した。
杵		キネ					餅搗きで使用。
臼		ウス	キウス イシウス	コメツキウス	オオウス		餅搗きで使用。胴部がくびれた臼と寸胴な臼がある。
石臼		イシウス		ヒキウス コヒキウス マメヒキウス ノリヒキウス			米、豆などを挽く。
紅鉢		ベニバチ		ベニバチ	ベニバチ		漬物、粉練り、団子作り、雑穀洗いなどに使用。ヘソという素焼き部分を傷つけない、また貸し借りしてはいけないといった(伊吹町1994)。
麺棒		メンボウ					蕎麦や饅頭を伸ばす。
麺板		メンバン コモチバン		メンバン コモチバン モチイタ			蕎麦や饅頭を打つ台。のし餅を作る場合にも使用した。
搗鉢		スリバチ		スリバチ	スリバチ		胡麻や味噌などをすりつぶす。
搗粉木		スリコギ	スリコギ	スリコギ		エブリ レンギ レンゲ	胡麻や味噌などをすりつぶす。米原市ではエブリ、レンギ、レンゲなどという(伊吹町1994)。
卸器		オロシカキ		オロシカキ ショウガオロシ			生姜、大根、とろろいも等をすりおろす。
篩		コナフルイ コナトオシ		コナフルイ コナトオシ ヌカフルイ			曲物。石臼で挽いた穀物の粉をふるい、再度ひく粗い粒を選別する。
醤油濾		ショウユコシキ シコミカゴ		ショウユコシキ シコミカゴ	スノコ		醤油を作る道具。もろみのなかに押し、その中にたまった醤油を汲みとる。
豆腐箱		トウフバコ		コシオケ			大鍋で煮た豆乳を布袋で漉し、オカラを除いた後、桶の上に糞の子、底板、箱枠を置き、内側に漉し布を広げて豆腐液を入れ、水分が小穴から洩れて内側に豆腐が残る。
苦汁受		ニガリウケ		ニガリウケ			塩俵の上に置き、ニガリが落ちてくるのを受けた。
栃圧		トチヘシ		トチヘシ			栃の実の皮破り具。栃の実を左手で差し挟み、右手で握りを強くおさえる。


名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
飲食器							
小皿		コザラ オテシザラ		オテシザラ オテシ	コザラ	カサ	漬物などを盛る。
鉢		サイバチ コバチ		サイバチ	コバチ ナンキンコバチ		冠婚葬祭のときに来客用の煮物などを盛る。
高膳		タカゼン タチゼン			タカゼン タチゼン タカオゼン		仏事の際に僧侶が使用。または正月に家長が使用した。
日光膳		ニッコウゼン				ニッコウゼン	冠婚葬祭などの際に親戚や来客に食事を出すときに使用した。各家に20~30人前はあったという。
中膳		チュウゼン			チュウゼン		日常の食事で使用する。食事後には各自で碗をのせたまま膳棚にしまった。
吸物膳		スイモンゼン ベタゼン		スイモンゼン	ベタゼン		慶事の際に家族や親類の祝膳として使用した。来客には高脚膳を使用した。
若狭膳		クルミアシ ワカサゼン			クルミアシ クルミゼン	ワカサゼン	葬式の際に使用する。高島市今津町棕川では家族の銘々膳としても使用した。
丸膳		クツキゼン マルゼン			マルゼン	クツキゼン	家族の銘々膳として使用。飯碗、汁碗、小皿、など自分専用の食器を乗せ、台所の畳の上に置いて食事をした。食事が済むと、台所の隅にある膳棚へ片付けた。
酒器							
酒甕		サカガメ サカダル サカビン		サカガメ サカダル サカビン	サカガメ サカダル サカビン		酒屋で酒を購入し、酒甕に入れて家まで運ぶ。
徳利		トックリ		イッショウトックリ サカドックリ			酒の小売りの時に使用。
爛徳利		チョウシ		カンドックリ			酒の爛をするのに使用。
盃		サカズキ					酒を飲むときに使用する。
運搬・携帯用具							
重箱		ジュウバコ			ジュウバコ		料理を入れて持参したり、そのまま席に出す。
七子重		ナナコジュウ ナナツイレコ		サカエジュウバコ	ナナコジュウ ナナツイレコ		慶事や凶事に赤飯、ボタ餅を入れて配る。
提重		サゲジュウ デマエバコ		デマエバコ	サゲジュウ	オカモチ	野良仕事の時、家から田圃まで食事やおやつなどの食べ物を入れて運ぶのに使用。
弁当箱		ベントウバコ タジ		ベントウバコ		タジ	農作業や漁にでるときに弁当を入れた。
めんば		メンバ メンツ	ワッパ		オカワベントウ ベントゴーリ ワゲビツ コビツ	メンバ メンツ	曲物の弁当箱。上下で一升のごはんが入り、昼とコビルの二回分を入れることができた。
茶樽		チャダル		チャダル	チャダル		農作業や山仕事の際に茶を入れて持って行く。樽なので、お茶が冷めなかったという。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
水筒		スイトウ ミズヅツ	タケノツツ	スイトウ ミズヅツ	ミズヅツ		竹製。山仕事などの外出時に酒や茶を入れて持っていく。
喫煙具							
煙管入		タバコイレ キセルイレ		タバコイレ キセルイレ			キザミタバコとキセルを入れて、携帯する。湖魚や貝の行商時に腰の帯にはさみ、休憩の時に一ふく吸った。
煙管		キセル					キザミタバコを火皿の中につめ、吸口を口に入れて煙草の煙を吸う。米原市ではキシヨロ、キセリ、キセロともいう(伊吹町1994)。
煙草入		タバコイレ ドウラン		タバコイレ		ドウラン	刻み煙草を入れる。
煙草盆		タバコボン		タバコボン			火入れと灰入れをセットにしたもの。来客時に使用した。
住							
火床の用具							
囲炉裏		イロリ ユロリ		カマド	カナワ	ロ ヒナタ	板間や土間で火を炊く場所。県内全域でイロリ、ユロリと呼ぶ。一方でヒナタ(長浜市余呉町)、カマド(長浜市木之本町)、カナワ(高島市)などと呼ぶ地域もある(民俗地図)。高島市朽木では小型のものをロという(県教委1969)。
竈		クド(フド) カマド ヘツツイ	カワラクド ツチクド ドベツツイ		ミツクド オオガマ ロクダイ	コウジン サンボウコウジン	台所の土間において煮炊きする。8升、5升、3升の3つの焚口があり、ミツクドとも呼ぶ。ミツクドの最大のもの、または別に大きな竈を作り、オオガマサンやサンボウコウジンと呼んで竈神を祀る。長浜市周辺では竈を載せる板をロクダイと呼び(県教委1979)、東近江市では竈自体をロクダイと呼ぶ(県教委1966)。
		ヌカクド オオガマ	ヌカクド ヌカカマド テツクド		オオガマ	カマド	冠婚葬祭、報恩講、味噌炊きなどの際に屋外で使用した。ヌカクドは昭和10年頃から販売され、親殻を入れて火を点けると強い火力で燃えたという(日比2000)。
十能		ジュウノウ シャナ		ハイカキ		ジュウノウ シャナ センバ	炭火、残り火、灰などをとる時に使用。米原市では十能をセンバ、小十能をシャナという(伊吹町1994)。
火消壺		スミケシ ケシツボ		スミケシ	ケシツボ		竈で出来た炭を入れる容器。
五徳		ミツアシ ゴトク カナワ	カナワ カナゴ		ゴトク サントク ミツアシ	サンボンサン サンボウコウジン	囲炉裏や火鉢の中に置き、薬缶や鍋をかける。脚を上にするものと、下にするものがある。県全域でゴトク、カナワが多い。甲賀市南部の山間地域でサントク、ミツアシ。大津市朽木地域のみ、サンボウコウジン系の呼び名がある(『民俗地図』)。
暖房具							
火箱		ヒバコ			ヒバコ		木枠の中に壁土を入れ、その中に鉄製の釜を入れる。野外や土間で使用した。
長火鉢		ナガヒバチ		ナガヒバチ	ナガヒバチ		部屋に置いて暖房として使用した。
箱火鉢		ハコヒバチ		ハコヒバチ	ハコヒバチ		火炊座(竈の隅)に置き、一年中火が絶えないようにした。常に土瓶で湯を沸かしていた(長浜市尾上)。
土風炉		ドフロ	ドフロ				木箱の中に陶製風炉を入れ、上に蓋を乗せる。下部の引出しには乾燥の必要な食料を入れておく。火は炭団、豆炭、木炭を用い、番茶を入れた薬罐をかける。
炬燵		コタツ ヒバコ バンドコ	カワラゴタツ	ヒバコ アシアブリ	ヤグラコタツ オキゴタツ	コタツ バンドコ バンコ	冬に布団の中へ入れ、足を暖めた。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
火箸		ヒバシ		ヒバシ	ナガヒバシ		炭をはさんで他へ移す時に使用。
炭取		スミトリ スミイレ		スミトリ スミイレ			炭俵から炭を出し、火鉢のところに持って行く。
灯火具							
付木		ツケギ イオウギ	イオウギ	ツケギ			松を薄く削り、先に硫黄を付けたもの。火種から灯芯や燃料に火をうつすのに使った。
行灯		アンドン					座敷内の照明器具。光量の強弱を調整できる。燧石で火綿(ホワタ)に引火させ、付木に火をつけて点灯した。下の引出しに予備の灯芯を入れておく。
提灯		チョウチン		コンバンチョウチン	ユミハリチョウチン		夜間外出時の明りに使用した。日常で使うものをコンバンチョウチンという(伊吹町1994)。
ランプ		ランプ オキランプ		オキランプ	ダイランプ		電気導入まで使用された。移動できるため、集会や机の灯りに利用された。
油差		アブラサシ カナイロ	カナイロ				灯油(種油)を入れ、灯明皿に油を入れる。
家具							
水屋		ミズヤ ショッキダナ		ミズヤ ショッキダナ			食器収納用の戸棚。
箆笥		タンス		コダンス コヒキダシ			上下に分かれる。婚礼の際に持参した。主に衣類を入れる。
長持		ナガモチ					衣類などを収納する。
挟箱		ハサミバコ ツツラ					衣類など収納する。婚礼の際に持参した。
行李		コウリ	ヤナギコウリ トウコウリ				柳や籐製。衣類などを収納したり、旅行の際に衣類を入れて運ぶ。
衣裳籠		イショウカゴ ミダレカゴ		イショウカゴ			脱いだ衣類を入れる。柳行李を上下に分けて使うこともある。竹製のものをイショウカゴという。
机		ツクエ ショセイヅクエ		ショセイヅクエ			ショセイヅクエとは進学のために書生として住込んだ時に用いたもの。
寝具							
掻巻		ヨギ ヨブスマ	ヨブスマ	ヨギ ヨブスマ			ヨブスマとは古い麻布を重ねて丹前状にしたもの(伊吹町1994)。
箱枕		ハコマクラ キマクラ	キマクラ		ハコマクラ タカマクラ	ヨシワラマクラ	日本髪的女性が使用した。夏はゴザマクラを使用した。
水回りの道具							
釣瓶桶		ツルベオケ ミズオケ		ツルベオケ ミズオケ			井戸の水を汲むのに使用。跳ね釣瓶用。
		ツルベ ツルベオケ		ツルベ ツルベオケ			井戸の水を汲むのに使用。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
滑車		カッシャ					井戸の水を汲み上げるための滑車。釣瓶の綱をかける。
釣瓶揚げ		ツルベアゲ イカリ		ツルベアゲ	イカリ		井戸の中に水汲用の釣瓶の綱が切れて落ちた時に引き上げるのに使用。また、冷やしておいた西瓜などが落ちた時に拾い上げた。
風呂桶		オケプロ ゴエモンプロ			オケプロ	ゴエモンプロ	風呂桶の中へ30～50 cm程度の水を入れ、下から焚く。湯の上に浮く蓋を踏んで中へ入り、座って入浴する。入口の扉を閉じ、上の蓋を閉じると少ない湯でも湯気がこもり冬期でもよく暖まった。燃料は藁、柴、落葉を使用した。
風呂蓋		フタ カサ	カゴ コモボタ ワラバタ		フタ カサ カブリ		風呂が土間で露出しているため、防寒や裸体を隠すために使用された。天井の滑車に紐を通し、一端に竹籠、他端に石を吊し、上下いずれの位置にも停止する仕掛けとしていた。
盥		テダライ チョウダライ		テダライ チョウダライ			顔洗いや手洗い等に使った。婚礼には必ず持参した。僧侶や来賓の手洗い用。
掃除用具							
箒		ホウキ	ワラボウキ スキボウキ シュロボウキ				掃除に使用。材質により様々な名称がある。
その他							
雪掻		ゴイスキ テスキ バンバコ		ゴイスキ	テスキ	バンバコ	除雪に使用。材質はヤナギトチ、カツラ、ヒノキ、スギ、ヤマザクラなど。高島市ではテスキという。ゴイスキは一枚板、バンバコは板に長い柄をつけたもので雪を押すもの(伊吹町1994)。
蚊帳		カヤ		カヤ			蚊が入らないように部屋の中に吊り、その中で就寝した。濃緑に染め、上の四周を赤い木綿で縁取りしたものを「近江蚊帳」といい、近江八幡の西川甚五郎が開発し、大ヒットしたという。
蠅帳		ハイイラズ ハイチョウ		ハイイラズ ハイチョウ			ハイイラズは網戸で蠅を防ぐと共に風通しを良くして腐敗を防ぐものである。ハイチョウはお皿の上にかぶせるものをいう。
社会生活							
水籠		ミズゴ		ミズゴ			竹籠の上から和紙を貼る。防火用バケツ。軒先に10個程度まとめ、家の2、3ヶ所に吊した。底から細い棕櫚の紐が出ており、これを逆にして吊す。
竜吐水		リュウドスイ ポンプ			ミズデッポウ	リュウドスイ	木製。銅の金具で留める。消火用ポンプ。
拍子木		ヒョウシギ					打ち合わせて音をだし、火の要心の点検をする。
信仰							
講桶		コウオケ コウシルオケ					木製。桶は鉄製。寺では年4回お講と呼ばれる会食があり、当番の家から汁を入れ天秤で担いで本堂へ運んだ。桶は2つで一対で、各戸一対の講桶が常備されていた。
椀		タジ オコバコ			オコバコ		日待講などの講の当番の家では、オコ汁(打豆と大根を入れた味噌汁)や鉢物(ワラビ、ゼンマイ等の煮しめ)を出す。出席者はご飯のみを椀に盛り、この箱に入れて持参した。
山の神		ヤマノカミ					正月に山の神を祀る。木に男女の顔を刻み、墨で描く。集落の男性は朝に山の神の斎場に行く。
牛王印		ゴオウ ゴオウホウイン				ゴホンサン	柳に奉紙をはさむ。祈禱札は神棚にまつり、6月の苗代田植の際に田圃の水口に差して拝む。
神棚		カミダナ		カミダナ		ダイジュサン	家の神棚で、天照皇大神の神札、氏神の神札などを祀る。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
仏壇		ブツダン ヌリダン		ブツダン	ヌリダン		家の仏壇。先祖を祀る。
勧請吊		カンジョウナワ		カンジョウナワ			櫓を十字に組んで周囲に円形にまわし、注連縄から吊り下げる。 正月に集落の境界に吊り下げる。
形代		ホウソウガミ				ホウソウガミ	棧俵に持手を付け、赤い和紙を巻く。竹に赤い和紙で作った両流れの御幣を付ける。種痘の接種は1、7、10歳頃に受けた。接種が終わると、痘瘡神を作って床の間に祀り、蠟燭、御神酒を献じて抗体が出来ることを祈る。傷跡は2週間程度で治癒するので、この頃に神送りをする。
苞		ツト					小野神社ひとぎ祭で配る苞。 11月2日に宮年寄が集まって餅を搗き、水を加えて固め、10cmほどに作り、ワラツトに入れる。神前に供えたのち、村の3ヶ所で道路を跨いで青竹を2本立て、薬縄を渡してツトを通す。宮年寄らが拝み、ツトを外して通行人や近所へ配る。
三方		サンボ		サンボ			神仏へのお供えをのせる。
火打石		キヨメイシ		キヨメイシ			火打石はチャート。火打金は鉄製。開店前に清めのため切火をする。神棚に向かい1回、裏手戸に向かい1回、2階の階段に向かって1回切火する。
桶		オブクマイオケ オブクオケ		オブクマイオケ オブクオケ			集落内の寺社で、参詣の際に持参した御供米をこの桶に入れる。
燭台		ツルカメ			ツルカメ		仏壇の蠟燭立。
祭羽織		マツリバオリ		マツリバオリ			八日市の皇美麻神社春大祭の際に役員(若衆頭、行司)が使用した。行司役はこの上に袴を着用する。
神主装束							村の神社には宮司がいないため、氏子の中から神籤で当番神主を選び、神社の勤めをする。その時に着る衣装。
草履		オプトジョウリ			オプトジョウリ		紙で鼻緒を作る。祭礼で神主、村役人が本殿に登る際に使用した。
民俗知識							
矢立		ヤタテ					真鍮製。筆記用具。墨壺に綿を入れ、墨を流し込む。筆筒に毛筆を入れる。
硯		スズリ					石製。墨をする。江戸時代から高島硯が有名。
硯箱		スズリバコ		スズリバコ			書状、便箋、葉書などを入れた。
文箱		フバコ テブンコ		フバコ テブンコ	コバコ		書簡を入れる。
薬研		ヤゲン					漢方薬を作る際に薬種を砕き、粉にする。
薬箱		クスリバコ		クスリバコ			各家に置いてあり、薬売りが使用した薬を清算し、新しいものに詰め替えた。富山の薬売りが多かった。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
人の一生							
産着		ウブギ オブギ					嫁の実家から送られる。 甲賀市信楽町多羅尾では男の子の場合、黒地に鯉のぼりや武者人形。袴から一寸下から縦に十一針、左下に向けて七針背縫いする。女の子の場合、赤で五つ紋の入った裾模様。袴の中心から一寸下から縦に十一針、右に七針背縫いする(中京大1977)。
		ヒトツミ	ワタコ テンテコ		カイツマミ	ヒトツミ	
半纏		ネンネコ オイネプトン			ネンネコ オイネプトン	オイネプトン	幼児を背負い、その上にはおる。
焙籠		アプリカゴ			アプリカゴ		冬期、火鉢の中に入れ、濡れたおしめを貼りつける要領で被せた。
畚		フゴ イジコ				フゴ イジコ	家族が農作業をする際に乳児の中に入れ、布等を詰めて動かないように固定し、寝かせておく。 底に杉板をつけて揺れるようにした(高島市今津町椋川)。
乳母車		ウバグルマ			ウバグルマ		子どもを乗せて移動する。
駕籠		カゴ					婚礼の際に新婦をのせて婚家へ向かう。
角隠		ツノカクシ			ツノカクシ		婚礼の際の祝言、村歩きに用いたもの。高島田にかけた。
打掛		ウチカケ			ウチカケ	ウチカケ	婚礼の際に使用。
長襦袢		カサネ キモノ			カサネ	カサネ	婚礼の際に婚礼衣装の下に重ねて着る長襦袢。
白無垢		シロムク			シロムク	シロムク	婚礼で使用した後、葬儀で出棺の際に女性が肩にかけて見送った。
下駄		ヨメイリゲタ			ヨメイリゲタ	リキュウゲタ	婚礼用の下駄。晴天の場合はリキュウゲタ、雨天の場合はタカゲタを使用する。
斗掻		マスカキ			マスカキ		柁ではかるときにはみ出た部分を落とす。米寿の記念に屋根にまたがり、竹を切って柁掻を作り、近所に配る風習があった(柏測1988)。
酒器		シュキ					軍隊に入隊し、2年の義務期間を終えると除隊記念として、親類に酒器を配った。
仏壇		オクリボトケブ ツタン					葬儀の際に送り仏壇を主として床の間に飾りつけた。引出し2段を裏返して階段状にして使用した。
麻		アサ	アサ				麻の芋をたばねたもの。葬儀用。送り仏の仏壇と共に持ち運ばれた。加工をしない剥き麻は最も穢れないものとして葬儀に使用した。
鈴		リン					葬儀用鈴。路念仏に使用。

名称	画像	滋賀県での名称	材質	用途	形態	その他	説明
足袋		タービ					葬式の際に棺を担ぐ者が使用したもの。
輿		コシ			コシ		集落で行う葬儀の際にスワリカン(座棺)の上にかぶせ、腕木にのせ、墓場まで運んだ。
年中行事							
注連縄		シメナワ			シメナワ		稲穂と美濃紙で作った御幣を挟み、葉付きのみかんを付ける。平成3年に製作。平成4年、湯坪神社拝殿に吊されていたもの。
三方		サンボウ			サンボウ		旅籠で正月の鏡餅を飾るのに使用。
雛人形		ヒナニンギョウ					3月3日の節句の時に床の間に飾る。初節句の際に、母の実家から送られたもの。
鯉幟		コイノボリ			コイノボリ		5月5日の節句に飾る。
武者人形		ムシャニンギョウ					5月5日の節句に合わせて、5月1日～10日まで床の間に飾る。粽、酒等をへぎに入れて供えた。明治30年生まれ男性の初節句の際に母の実家より送られたもの。
盆灯籠		トウロ ボンドウロウ		ボンドウロウ			木枠に薄紙を貼り、型紙を切りぬいた金紙を上から貼る。一対作るのに2日半かかった。新盆に自宅で当主が祀った。親戚の分も用意したため、一軒の家に数個あった。

滋賀県の民具名称

辻川智代

1. はじめに

滋賀県は近畿地方の北東に位置し、京都府、福井県、岐阜県、三重県と接している。中央には県全体の6分の1の面積を占める琵琶湖があり、周囲を平野が、さらにその周囲を標高1,000mを超える山々が取り巻いている。そのため、滋賀県の地勢的な特徴として、湖、平野、扇状地、山といった複雑な地形となっていることがあげられる。

また、現在でもJR東海道線・新幹線、名神高速道路、国道1号線・8号線が通るなど交通網が発達しているが、江戸時代には京都から江戸へ至る東海道・中山道をはじめ、北陸方面に抜ける北国街道、若狭へ抜ける鯖街道など、周辺地域への交通の要衝であった。北前船が開発されるまでは、敦賀で水揚げされた物資が峠を越えて運ばれ、琵琶湖の水運で大津へ、さらに京都・大坂へと送られていたほどである。

このような地勢から、滋賀県はもともと旧国としては近江一国であったにもかかわらず、県内をさらに細かい地域名称を用いて、湖西、湖南、湖東、湖北と呼んでいる(図1)。湖西は鯖街道により京都・若狭の影響を、湖南は東海道により伊賀・伊勢の影響を、湖東は中山道により美濃、湖北は北国街道により越前の影響を受けている。福井県敦賀市や若狭地域は、近代において一時期滋賀県であったほどつながりが深い。

2. 今回のデータについて

今回使用した民具データは、滋賀県立琵琶湖博物館(以下、琵琶博)所蔵資料が中心となっている。琵琶博所蔵資料は、滋賀県教育委員会(以下、県教委)が1978年から1996年までに収集した資料を中心とし、その後に琵琶博として収集した資料(1997年~)で構成されている。これらの収集資料のデータは『琵琶湖博物館収蔵資料目録』⁽¹⁾として刊行され、インターネット上で公開している⁽²⁾。

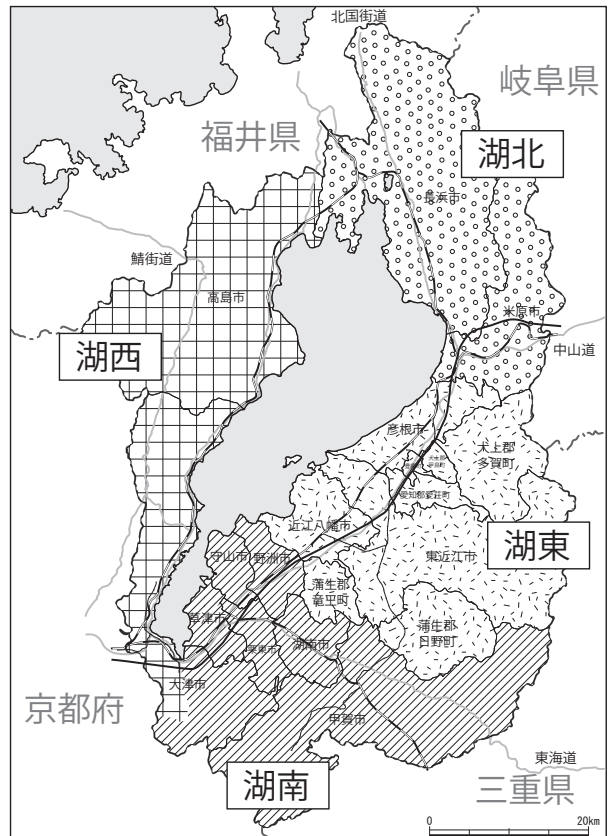
この資料の特徴は、工業製品や電気・ガソリンなどの動力を必要とするものが少ないこと、県教委が収集過程で漁撈習俗に主眼を置いたため1万点を超える漁撈資料があることなどが挙げられる。また、県内においては初期の収集であったため、近世・近代にさかのぼる古い資料が多くなっている。以上のことから、今回の民具名称調査においては恰好の

材料となった。

一方で、琵琶博所蔵資料にないものがいくつかあった。そのため、県教委の報告書、博物館・資料館発行の図録・目録、市町村史、字史などからデータを作成した。特に、昭和40年代から50年代に多く刊行された他県から調査に入った大学の民俗調査報告書は聞き取りの成果が細かく記述されており、非常に参考になった。その中で特に写真や図などで民具資料の形態と名称がわかるものを使用した。

分類の並び順に関しては、神奈川大学国際常民文化研究機構2014『国際常民文化研究叢書6』—民具の名称に関する基礎的研究—[民具名一覧編]の一覧表に準拠した。ただし、下位の分類や一覧表にないものに関しては琵琶博の分類基準(琵琶博2009)を使用している。特に、全国表にはない「社会生活」「人の一生」「年中行事」などについては、琵琶博の分類を使用した。

図1 滋賀県の地域名称と市町村



3. 滋賀県の民具名称の事例

滋賀県の民具名称については表を参照されたい。表では字数の都合から、民具名称の分布状況について詳細に記述できなかったため、特徴的なもののみ、ここで述べることにする。

1) 農耕用具

鋤

滋賀県では鋤の一般名称として、スキとホリの二つの名称が見出せる。県下全域ではスキと呼ぶが、湖北地域の一部でホリという名称がみられる(図2)。これらの名称は鋤く、掘るといった動詞の名詞化と考えられ、湖北地域においては牛による犁耕が少なかったため、人力で鋤を用いて耕していたからではないかと考えている(辻川 2011)。

また、鋤は形態や用途などによってさまざまな名称がある。形態としては①大きさ、②形、③材質などに由来する名称がみられる。①については、オオズキ、チュウズキ、コズキなどの名称がある。②については、ヒラズキ、テッポウズキ、シャミズキ、サキヤリズキなどがある。テッポウズキは柄が鉄砲に、シャミズキは三味線に似ていることから、サキヤリズキは刃先が槍のように尖っていることからの命名であろう。サキヤリズキは湿田の耕起の際に鋤の刃先を左右に倒しながらすいたり、畝を砕いたりするのに使用したという(長谷川 2006)。③についてはフロズキ、カナズキの名称がみられる。用途からの名称としては、耕起に使用するタハネボ

リ、ホリタスキ、ハネタスキ、畦に関係するアゼホリボリ、チュウハンズキなどがある。

一方、琵琶湖博物館には県指定有形民俗文化財として、東近江市(旧八日市)の柄屋「柄藤(からふじ)」で使用された柄屋(からや)道具が収蔵されている。柄藤で製作した鋤はオオスキ、ミノスキ、テッポウスキ、シャミズキ、キタカタスキなどがある。キタカタスキは収集時の聞き取り調査によると、彦根市・愛知郡・犬上郡など八日市より北方で使用されたという。

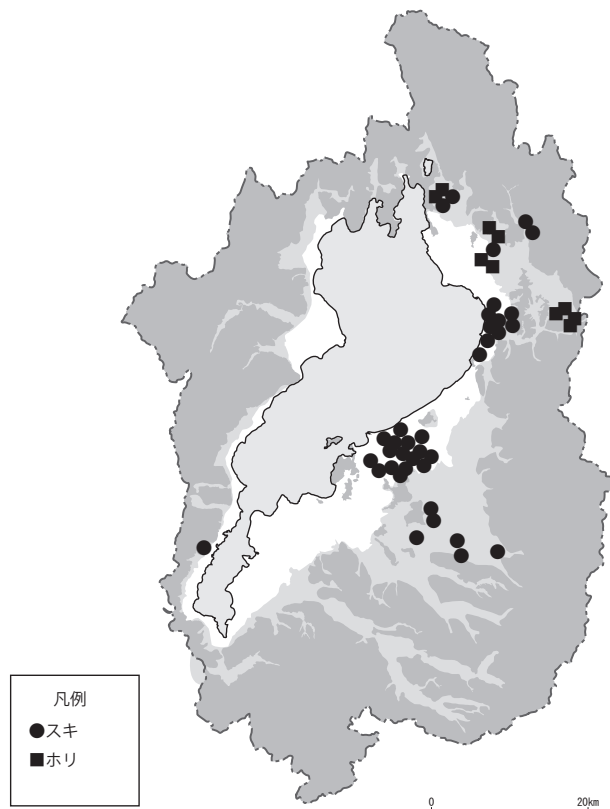
柄藤でも製作している「ミノスキ」は漢字を当てると「美濃鋤」になるだろうが、美濃とどのような関係があるのか不明である。この鋤は、柄藤では蒲生郡竜王町、日野町などに向けて生産している。材質も他の鋤が樫で作られるのに対して、桜を使用している。ミノスキの使用された地域は扇状地上に位置しており、砂地の田畑で使用するのに薄くて軽い鋤が好まれたらしい。

鍬

鍬には刃先が平たい平鍬や唐鍬と、先が分かれた股鍬がある。平鍬は木製の鍬先に鉄製の刃先をつけたものでフログワなどと呼ばれる。唐鍬はトグワ、トンガなどと呼ばれ、刃先すべてが鉄でできており、幅は狭くてもかなりの重量があり、山の開墾などで使われた。このような鍬は湖南や湖東の平野部では見られず、湖北や湖西の山間部でよく見られる。

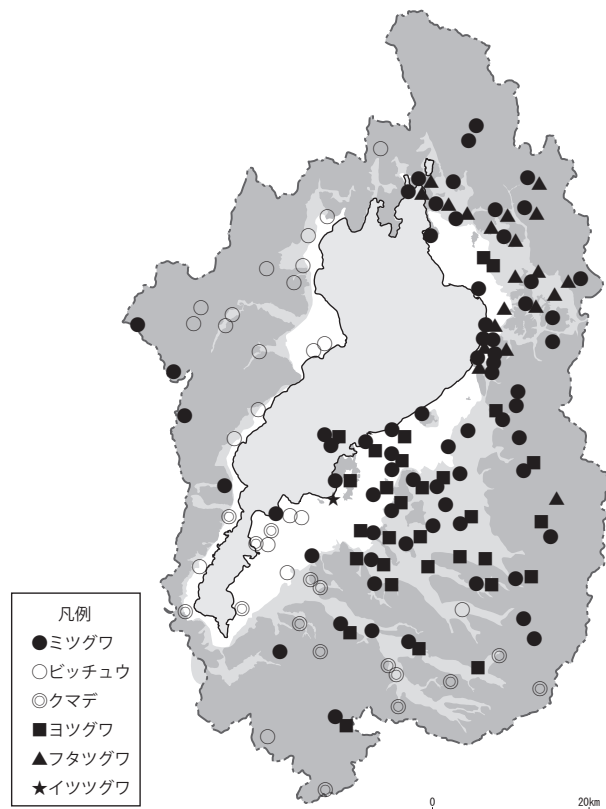
股鍬には先が二つのものから五つのものがある。先が三つに別れた三ツ鍬を県内全域で使用している。呼び名はミツグワが主流であるが、湖西地域ではピッチュウ、湖南地域では

図2 鋤の呼称



(琵琶湖博物館資料から作成)

図3 鍬の呼称



(県教委 1979『滋賀県民俗地図』に琵琶湖博物館資料を追加)

クマデと呼んでいる。また、刃先を平たくしたものをイチョウグワという。フタツグワは湖北地域に多く、ヨツグワは湖南・湖東地域で多い。イツツグワは少ないが、厩で使用したり、レンゲを鋤き込むときに使用する。このように股鋤は用途によって使い分けられている。

犁

犁はカラスキと呼ばれ、主に牛を使用した。昭和6年に競馬場が設置された草津市渋川周辺では馬が飼育されるようになり、犁耕も馬で行ったという。

一方、湖東地域の扇状地では人力で犁耕を行ったため、ヒトカラスキ、ジンリキカラスキの名称がみられる。

大足・田下駄

田植え時に肥料を梳きこむ、または代かきなどに使用するのをオオアシ、稲刈時になど湿田に足が沈まないために使用するものをタゲタという。湖北・湖西地域ではオオアシを使用するが、それ以外の地域ではあまり使わない。また、ナンバ、ナンバンという呼称もみられる。

同様のものに桶杓があり、オケグツ、オケナンバなどと呼ばれている。主に漁業で船に乗るときや湖岸でヨシの刈り取りを行うときなどに使用する。

龍尾車・龍骨車・踏車

これらの灌漑用具は滋賀県によく残存しているが、使用した地域には片寄りがみられる。龍尾車は高島市の沿岸部、龍骨車は近江八幡市で製作、湖南・湖東地域で使用された。踏車は大津市堅田、近江八幡市北之庄、彦根市三津屋などで製作され、湖南、湖東地域の平野部で使用された。

唐箕

唐箕は西日本型で脚が4本のものが主流である。しかし、6本脚の唐箕が愛荘町目加田で製作されていた(田中2007)。呼び名としては県内全域でトウミが優勢だが、栗東市、守山市、野洲市など湖南地域の一部でトウツワ、もしくはトウツバと呼んでいる。由来は不明である。

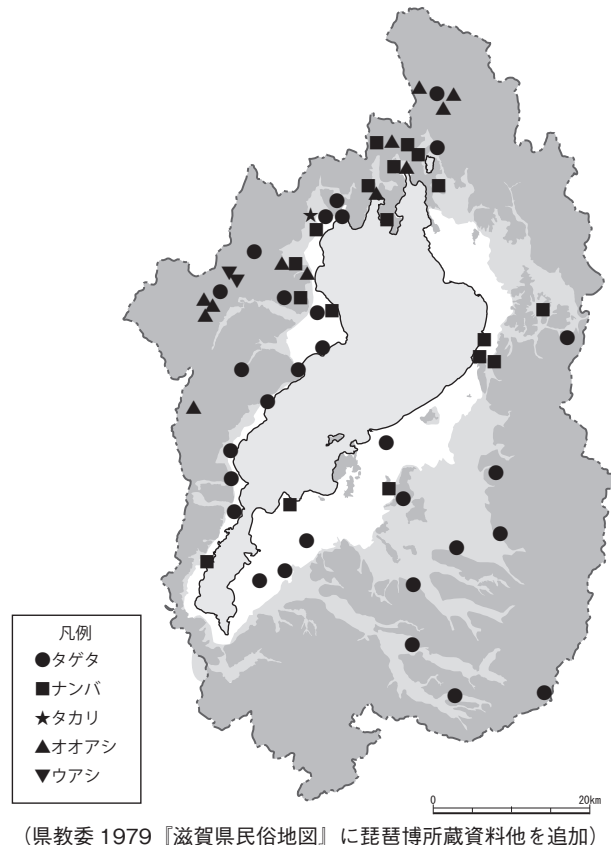
万石通

県内全域で可動式の脚をもつものが生産されたが、湖南地域のみ固定式がある。湖北地域ではカナドオシ、湖南地域ではマンガクドオシ、センゴクドオシが多い。万石通自体も湖北地域と湖南・湖東地域では型式が異なり、製作者の技術系譜が異なると考えられる。ただし、職人の系譜に関する聞き取り調査は行われておらず、詳細は不明である。

首木

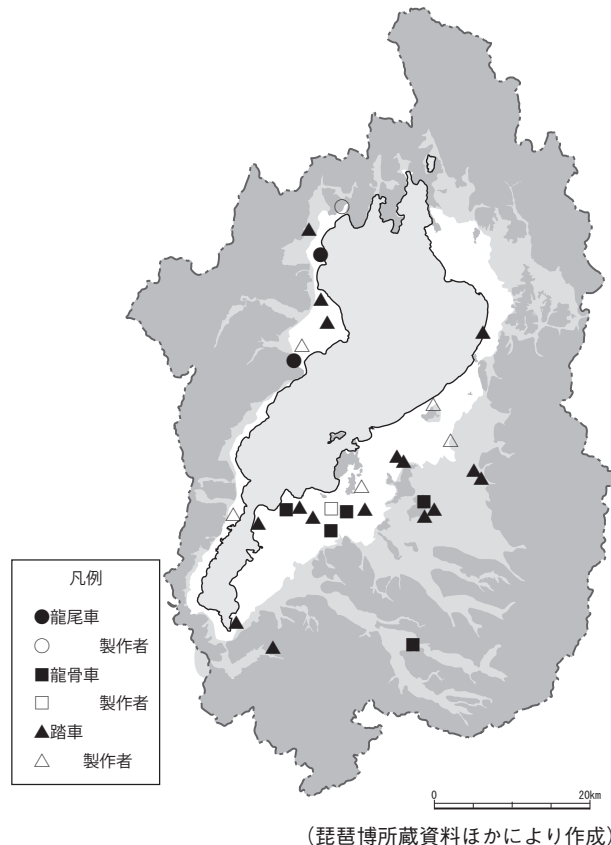
首木の名称としてはクビキのみであるが、全国的に販路を広げた「牛曰く極楽首木」(以下、極楽首木)があるため特筆する。極楽首木は、甲賀市土山町山女原の丸田兵太郎が発明し、昭和11年(1936)に「㊦(まるく)農園工藝部」から売り出したものである。昭和23年(1948)には、「丸田興業株式会社」に社名を変更し、「安楽首木」も生産するようになった。当時のチラシによると、首木の規格には「特大型」「大型」「中型」「小型」「調教用型」などがある。また、「二頭曳用」「水牛用」もあり、戦時中に中国、台湾、朝鮮半

図4 大足・田下駄の呼称



(県教委1979『滋賀県民俗地図』に琵琶博所蔵資料他を追加)

図5 龍尾車・龍骨車・踏車の分布



(琵琶博所蔵資料ほかにより作成)

図6 唐箕の呼称

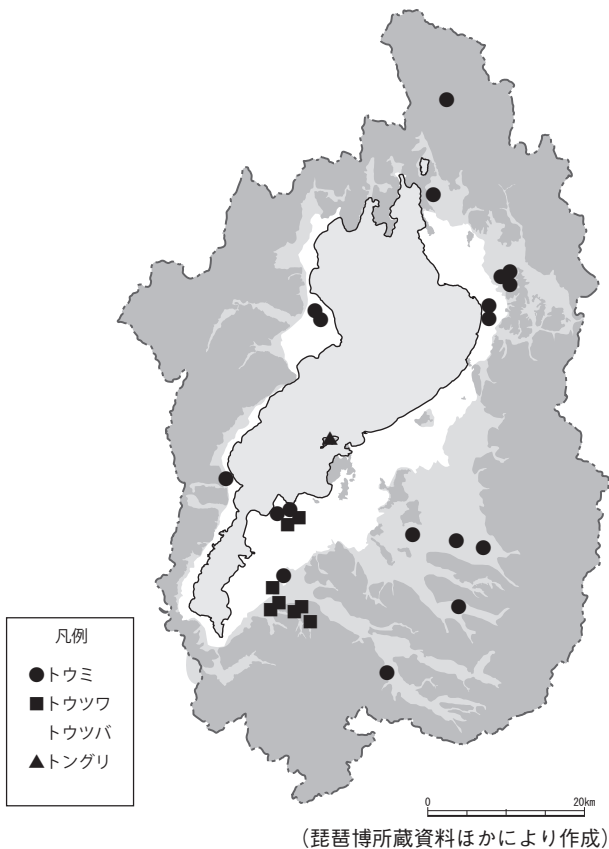
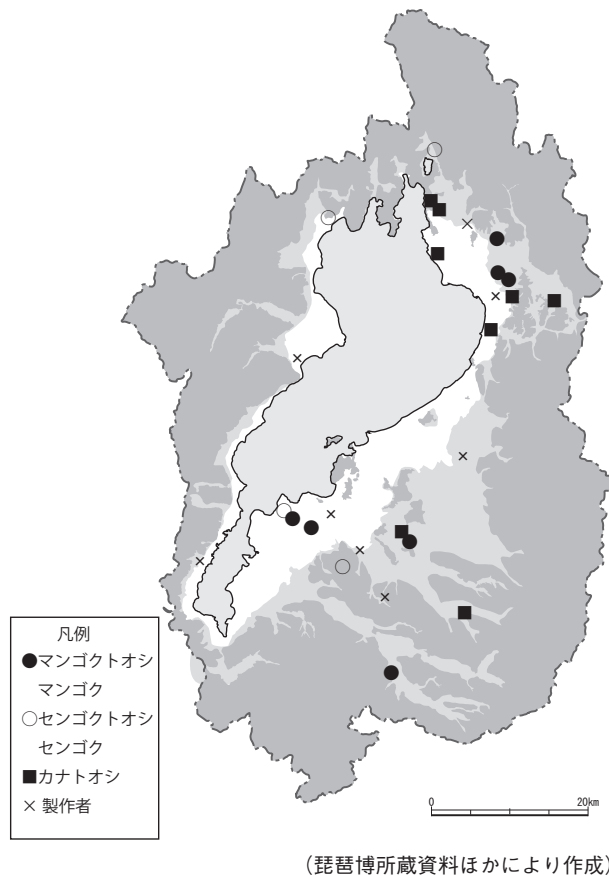


図7 万石通の呼称



鳥などに販売したものかと考えられる。さらに、特殊な形として「山口県型」が作られており、注文生産に応じて生産していたことがわかる (琵琶博 2012)。

2) 漁撈用具

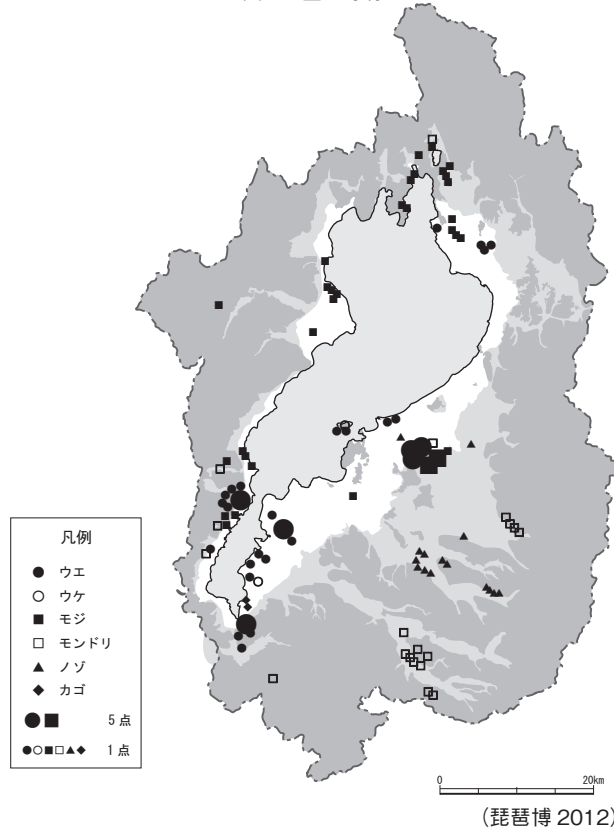
筥

県内の筥を製作技法から見ると、大きく二つに分類できる。一つは、割竹を簾状に編んで輪にし、外側と内側から竹や鉄製のタグで留めて円形にするもので、もう一つは、竹にそのまま割れ目を入れ、それを縦軸として皮竹を編んでいくものである。琵琶博収蔵資料 137 点のうち、後者は 2 点のみである。

名称を見てみると、ウエ、ウケ、モジ、モンドリ、ノゾなど多様である。琵琶湖周辺ではウエ、ウケ、モジ、内陸の河川ではモンドリ、ノゾなどと呼ばれている。筥で漁獲する魚は、ヒガイ、ドジョウ、ウナギ、コイ、フナ、ナマズ等で、目的とする魚を冠して、ギギウケ、ヒガイウエ (モジ)、ドジョウウエ、フナモジなどの呼び名もある。

筥による漁撈は水路や水田で小魚をとる「オカズトリ」といわれるものと、琵琶湖で使用する延縄状のものがある。これには大量に筥が必要となるため、漁は専門の漁師が行い、筥は守山市木浜の「ウエ熊」のような筥製作者に発注する。このような業者の販路に名称が広がった可能性がある。

図8 筥の呼称



一例として、ウエ熊は釜を魃師に販売してもらい、湖北まで流通させたという。

3) 運搬用具

畚 (フコ)

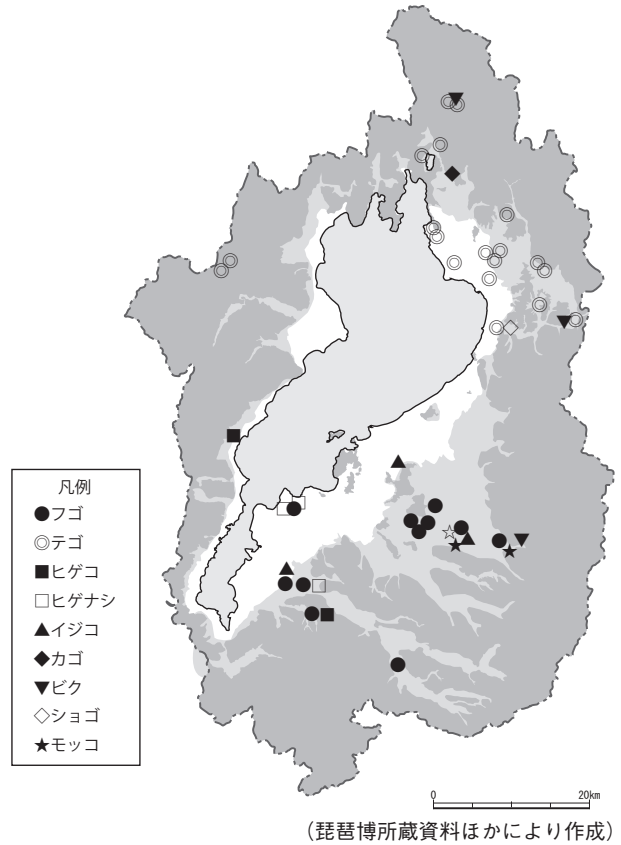
畚は藁などで編まれた容器である。県内で使用される畚類には、①飯櫃を入れる、②中に物を入れて運ぶ、③子供を入れるの三種類がある。①と③は県内全域でフゴと呼ばれているが、一部にイジコ、イズミと呼ぶ地域がある。②は材料や形態が多様で、そのため呼び名もさまざまである(図9)。主として、湖南地域ではフゴ、湖北地域ではテゴと呼んでいる。湖南地域の中でも野洲市、栗東市などヒゲコ、ヒゲナシと呼ぶ地域がある。天秤棒で運ぶための長い持ち手があるものをヒゲコ、持ち手が短いものをヒゲナシと呼んでいる。ヒゲコは弁当などを入れて運ぶもの、ヒゲナシは糠や野菜などの収穫物を運ぶものである。

4) 衣

仕事着

民俗地図によると、湖北でハンキモノ、湖西でハンコ、湖南でツツポと地域により明確に分かれるとしている。ただし、仕事着に関しては、単衣、裕、綿入等の区分や、刺子のドンザ(主に漁師が着用)、ツツレなどさらに細かく分類され

図9 畚の呼称



(琵琶博所蔵資料ほかにより作成)

図10 仕事着の呼称

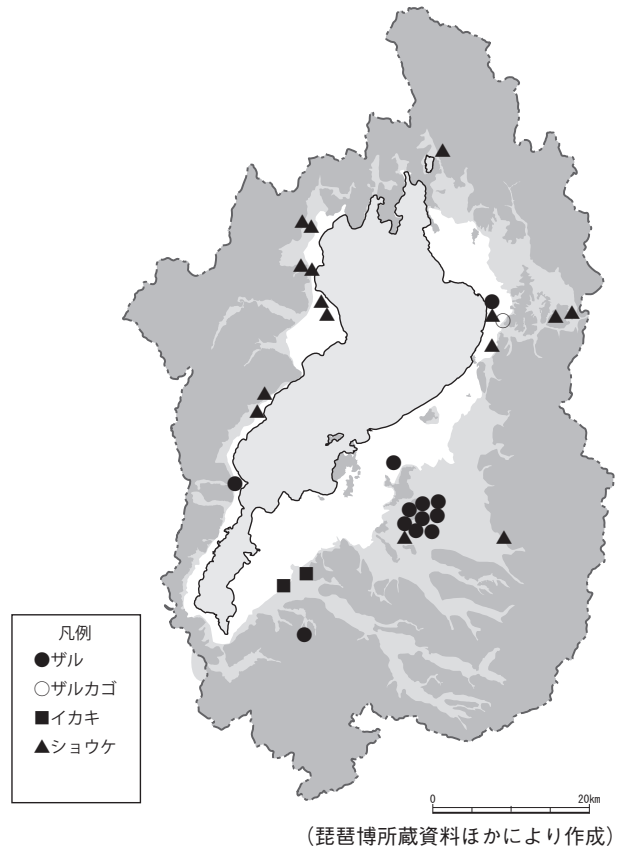
16 男の仕事着 (2) 上衣(b)

ツツポは筒袖の意味で三重県側からの影響を窺わせる。ドンザは古着を重ねて刺子にした着物で、防寒着を兼ねる。ハンキモノは丈の短い着物の意で、若狭地方で漁民が着用する。湖西は湖岸のハンコ山間のコンナンシ、湖北はナガキモノ、湖東のハッピ、湖南山間のツツポと明確な分布が見られる。



(県教委 1979 『滋賀県民俗地図』)

図11 箆の呼称



(琵琶博所蔵資料ほかにより作成)

るべきであろう。今回はそこまでの検討はできなかったため、今後の調査を期したい。

5) 食
 箆

箆は主にザルと呼ぶが、湖南ではイカキ、湖北・湖西地域ではショウケと呼んでいる。

6) 住
 イロリ

囲炉裏は湖南地域の平野部には少なく、山間部や湖東地域、湖北地域と北に向うにしたがって増加する傾向にある。また、湖西地域にも多くなっている。イロリ呼称の分布については『滋賀県民俗地図』に詳しい。県内全域ではイロリ、ユルリが多いが、一部にヒナタ（長浜市余呉町）、ホリゴタツ、ロ（長浜市）、カナワ（高島市）と呼ぶ地域ある。長浜市余呉町は福井県敦賀市と隣接しているため、福井県側での呼称が伝わったものか。

炬燵

炬燵は瓦質で、円形のものと同方形のものがある。湖北地域ではバンドコ、湖南地域ではコタツと呼ぶ。また、木製の枠をつけたヤグラコタツもある。木枠の中に鉄製の釜を入れた火鉢をヒバコと呼ぶ事例があるため、ヒバコ→バンドコ→コタツと変遷したと考えられる。

滋賀県の民具名称についての傾向をあげると、

- ①地域で別れるもの（湖西、湖南、湖東、湖北で異なるもの）
 一鍬、畚、仕事着、箆、囲炉裏、炬燵
- ②地形で別れるもの（湖岸、扇状地、山間地）
 一釜
- ③一地域のみ異なる名称が分布するもの
 一鋤、唐箕などがある。

①については、各地域は街道を通じて周辺地域と接しており、その影響があると考えられる。②については地形的な特質から民具の形態や使用方法が異なり、そのため名称も異なると考えられる。③についてはどのように伝播したのか不明である。

4. おわりに

今回の調査では民具名称を集成するだけで精一杯であった。実際には名称とそれが指す民具の形態の定義を明確にしなければ、名前の指すモノを同定することはできない。今後はさらに聞き取り調査を行ない、空白を埋めるようにしたい。

謝辞

本稿の作成にあたって、神野善治先生をはじめ、河野通明先生、川野和昭氏、佐々木長生氏、長井亜弓氏にお世話になりました。

図 12 囲炉裏

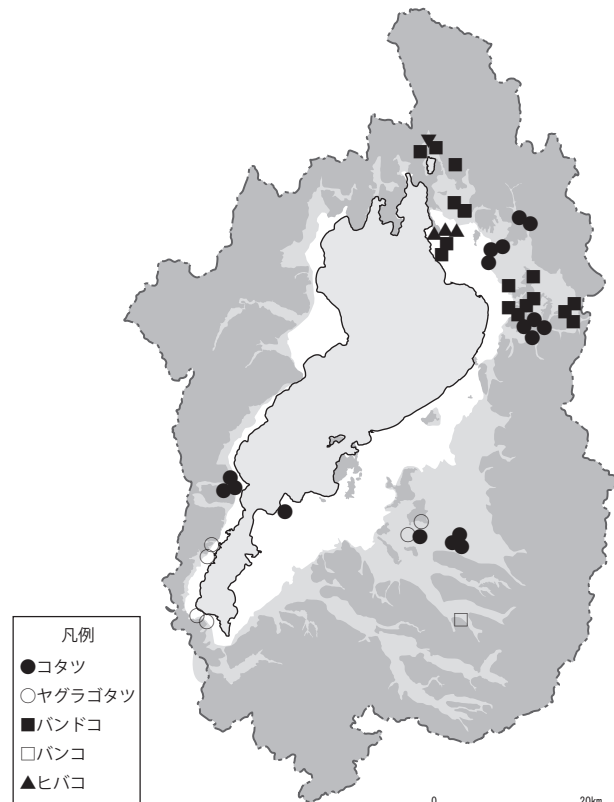
4 イロリの呼称

イロリ、ユルリと呼ぶ風が、県下では一般的である。ただ余呉町で、イロリをヒナタと呼んでいるのが目を引く。また木之本町では、イロリをカマドと呼んでいるが、その座名もヨコザを除いてハマ（主婦）、テマ（客）、キノゴ（下座）と余り類例のない呼び名を残している。



(県教委 1979 『滋賀県民俗地図』)

図 13 炬燵の呼称



(琵琶博所蔵資料により作成)

(1) 出典を特に明示しない場合、目録からの引用である。琵琶湖博物館の目録は、以下の5冊が刊行されている。
滋賀県立琵琶湖博物館 2006『民俗資料1 琵琶湖水系漁撈習俗資料(1)』(琵琶湖博物館収蔵資料目録第13号)
滋賀県立琵琶湖博物館 2006『民俗資料2 琵琶湖水系漁撈習俗資料(2)』(琵琶湖博物館収蔵資料目録第14号)
滋賀県立琵琶湖博物館 2008『民俗資料3 衣食住』(琵琶湖博物館収蔵資料目録第17号)

滋賀県立琵琶湖博物館 2008『民俗資料4 生産生業』(琵琶湖博物館収蔵資料目録第18号)
滋賀県立琵琶湖博物館 2009『民俗資料5 生産生業(諸職ほか)』(琵琶湖博物館収蔵資料目録第19号)
(2) 収蔵資料のデータベースは、琵琶湖博物館ホームページ(<http://www.lbm.go.jp/>)で公開している。

参考文献

井上(辻川)智代 2011「滋賀県の風呂鋤」(『淡海文化財論叢』第三輯)淡海文化財論叢刊行会
伊吹町史編さん委員会 1994『伊吹町史』文化民俗編(略:伊吹町 1994)
愛知川町史編集委員会編 2008『愛知川の歴史』(略:愛知川町 2008)
大塚清 1980「高島の民具⑩ コカシマタ」(『高島の民俗』第10号)
柏淵宏昭 1988「米寿の祝について」(『高島の民俗』第58号)(略:柏淵 1988)
神奈川大学国際常民文化研究機構 2014『国際常民文化研究叢書6—民具の名称に関する基礎的研究—[民具名一覽編]』
五個荘町歴史民俗資料館 1990『五個荘町歴史民俗資料館収蔵資料目録 第1集』(五個荘町文化財調査報告17)(略:五個荘町 1990)
湖東町歴史民俗資料館ほか 1988『湖東の文化財』(湖東町歴史民俗資料館ガイドブック)
山東町教育委員会 1988『ふるさと山東の民具』(略:山東町 1988)
滋賀県 1974『姉川源流地域学術調査報告書』(略:滋賀県 1974)
滋賀県教育委員会編 1966『愛知川ダム水没地域民俗資料緊急調査報告』(滋賀県文化財調査報告書第2冊)(『近畿の民俗 滋賀県編』1995再録)(略:県教委 1966)
滋賀県教育委員会編 1969『高島郡朽木村能家民俗資料調査概報』(『近畿の民俗 滋賀県編』1995再録)(略:県教委 1969)
滋賀県教育委員会編 1979『滋賀県民俗地図—滋賀県緊急民俗文化財分布調査報告書—』(略:民俗地図)
滋賀県教育委員会 1979『びわ湖の漁撈生活』(琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書1)(略:県教委 1979)
滋賀県教育委員会 1980『びわ湖の專業漁撈』(琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書2)(略:県教委 1980)
滋賀県教育委員会 1981『内湖と河川の漁撈』(琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書3)
滋賀県教育委員会 1982『湖西の漁撈習俗』(琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書4)(略:県教委 1982)
滋賀県教育委員会 1983『湖南の漁撈活動』(琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書5)
滋賀県立琵琶湖博物館 2012『民具を科学する—明治の絵図と現代の実測図から見た近江の民具—』

滋賀民俗学会 1967『江若国境の民俗—高島郡今津町—』
滋賀民俗学会 1968『湖東・湖西の山村生活—離村部落の民俗報告』
滋賀民俗学会 1974『野洲川下流域の民俗』
白井忠雄 1990「民具二題」(『高島の民俗』第72号)(略:白井 1990)
菅沼晃次郎 1975「木戸の民俗—滋賀郡志賀町」(『近江の民俗』民俗文化研究会)
成城大学民俗研究会 1986『滋賀県伊香郡西浅井町庄民俗調査報告書』(成城大学民俗調査報告書第9集)
田中由美子 2007「滋賀県愛荘町の目加田唐簀について」(『民具マンスリー』第40巻7号)神奈川大学日本常民文化研究所
東京女子大学民俗調査団 1984『甲賀山中の民俗—滋賀県甲賀郡水口町中一—』
中京大学郷土研究会 1977『多羅尾の民俗』(中京民俗第14号)(略:中京大 1977)
中京大学郷土研究会 1982『虎姫町の民俗—滋賀県東浅井郡虎姫町』(中京民俗第19号)
橋本鉄男編 1974『朽木村志』朽木村教育委員会(略:朽木村 1974)
長谷川嘉和 2006『近江の民具—滋賀県立琵琶湖博物館の収蔵品から—』(淡海文庫35)サンライズ出版(略:長谷川 2006)
日比繁一 2000『絵で語る昔の暮らし』(日比 2000)
増井金典編 2000『滋賀県方言語彙・用例辞典』サンライズ出版
水口町立歴史民俗資料館 1989『収蔵資料目録 第1集』(水口町文化財調査報告書第6集)(略:水口町 1989)
民具クラブ編集部 1984「常民展によせて」(『高島の民俗』第36号)(略:民具 1984)
武蔵大学人文学部 1989『湖南安治の生活と伝承』(武蔵大学日本民俗史演習調査報告XII)(略:武蔵大 1989)
守山市立教育研究所 1990『守山の民具』
行俊勉 2002「龍骨車—かんがい用具の流通と使用—」(『野洲町立歴史民俗資料館研究紀要』第9号)
八日市市史編さん室編 1986『八日市市の民俗』八日市市教育委員会(略:八日市市 1986)
余呉町教育委員会 1991『高時川ダム建設地域民俗文化財調査報告書』(略:余呉町 1991)
栗東歴史民俗博物館 1994『受贈民俗資料分類目録』(略:栗東 1994)